

千葉敬愛学園創立100周年記念事業
歴史シリーズ講演会 講演録

千葉氏研究最前線

—ここまでわかった千葉氏の実像—

令和7年3月31日

敬愛大学



「東鑑」
千葉市立郷土博物館蔵

教育の敬愛
～創立100周年～

而今日此條殿到著其地
十七日丙寅不待廣
葉介常胤相具子息太即
胤成四郎胤信大須五
頼東嫡孫小太即成胤等衆會
餉武衛令招常胤於座右給須以
仰云常胤相伴一羽冠進御前云以之被用

千葉敬愛学園創立一〇〇周年記念事業
歴史シリーズ講演会

千葉氏研究最前線

ここまでわかった千葉氏の実像！

9/28
土曜 13:00
(12:30 受付開始)

参加費
無料



「本佐倉城跡鳥瞰図」
酒々井町教育委員会蔵



「千葉貞胤画像」
千葉市立郷土博物館蔵

基調講演

「鎌倉幕府の展開と千葉氏 —常胤から頼胤まで—」

野口 実 京都女子大学名誉教授

発表1

「南北朝・室町期の下総千葉氏 —その危機と発展をめぐって—」

石橋 一展 千葉県教育委員会

発表2

もとさくらじょう

「今よみがえる戦国千葉氏の本拠本佐倉城」

広瀬 千絵 酒々井町教育委員会

会場 敬愛大学 2号館 2202 教室

主催 敬愛大学

後援 千葉県教育委員会 / 千葉市教育委員会 / 里見氏研究会

募集期間 8月1日(木)～9月6日(金)

定員 350名 ※応募多数の場合、抽選

応募方法
①WEB ②FAX ③往復はがき
上記いずれかよりご応募ください(各詳細は裏面へ)



◀ WEB申込の応募フォームはこちらより
URL : <https://x.gd/zJljN>

アクセス / お問い合わせ

会場には駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用の上、ご来場ください。



JR 稲毛駅より徒歩15分または
バス東口正面山王町方面行き
「敬愛学園」下車

千葉都市モノレール穴川駅より
徒歩12分

〒263-8588 千葉市稲毛区穴川1-5-21 TEL: 043 (251) 6363

目次

開催にあたって（中山 幸夫 敬愛大学・敬愛短期大学学長）	00
趣旨説明（滝川 恒昭 敬愛大学経済学部教授）	00
【基調講演】鎌倉幕府の展開と千葉氏―常胤から頼胤まで―（野口 実 京都女子大学名誉教授）	00
【発表1】南北朝・室町期の下総千葉氏―その危機と発展をめぐって―（石橋 一展 千葉県教育委員会）	00
【発表2】今よみがえる戦国千葉氏の本拠本佐倉城（広瀬 千絵 酒々井町教育委員会）	00
閉会にあたって（成松 恭平 敬愛大学副学長）	00



会場（敬愛大学）



講演会場



サテライト会場



司会

開催にあたって

中山 幸夫 敬愛大学・敬愛短期大学学長



皆さま、こんにちは。紹介いただきました敬愛大学・敬愛短期大学学長の中山と申します。本日は千葉敬愛学園創立一〇〇周年記念事業歴史シリーズ講演会にご参加をいただきまして誠にありがとうございます。八月一日から申し込みの受け付けを開始しましたが、定員三五〇名があつという間に埋まりました。実はこの会場だけでは収容できないぐらいくの方にお申し込みをいただきました。本日この隣の新館、新教育棟の一号館の六階に別会場を二会場設けまして、そちらのほうで現在の講演会を聴講されている方もいらっしゃるという状況でございます。大変多くの皆さんに関心を持っていただきまして大変うれしく思っております。

さて、私どもの千葉敬愛学園は現在、大学、短大、そして二つの高等学校、短大の付属幼稚園を持つ総合学園として発展しております。そして再来年度二〇二六年、令和八年に学園は創立一〇〇周年を迎えるという、そういう状況でございます。この間、さまざまな困難や試練、紆余曲折はございましたが、敬天愛人の建学の精神のもとに教職員が結束いたしました、地域の方々をはじめ、多くの関係者の皆さまの温かいご支援と激励をいただきながら大きな節目のときを迎えようとしております。大変大きな喜びであり、皆さまに深く感謝を申し上げる次第です。

学園創立一〇〇周年を迎えるに当たりまして、さまざまな取り組みが行われておりますけれども、その一つがこの稲毛キャンパスの整備計画の進行であります。この二月にこの建物のすぐ隣に新しい建物、新教育棟ができました。新一号館と名付けられましたこの新教育棟が竣工となりまして、教育環境の改善を進めることができました。既存の施設につきましても改装、改修工事を行うことでキャンパス全体の美化、教育環境

の充実を図っているところでございます。

実はこの二二〇二教室も今年度前期に少し改修工事をしまして、全体ではないのですが、かなりリニューアルされたということでございます。以前はこのようなスクリーンがなかったんです。実はこの前にあったのですが、非常に使いづらくて。そして風が吹きますと揺れるものですから、学生の皆さんもちよつと見にくいというような、そういう状況でしたので、大変見やすくなりました。この点も大変良かったなというふうに思っております。

こうしたなかで、先ほども少し触れましたが、本学園が二年後に創立一〇〇周年を迎えるということで、奇しくも本学が拠点とする千葉市も再来年開府九〇〇年を迎えるということになります。千葉市の九〇〇年と本学園の一〇〇年では、この時間的なスパンがあまりにも違うのですけれど。

千葉市において本学園も一〇〇年にわたり存在を続けてきたということで、学園関係者、先人の方々の献身的な取り組みに深く感謝をするとともに、学園の創立一〇〇周年の年が千葉市開府九〇〇年であることに不思議な巡り合わせと、千葉市との深いつながりを改めて感じておるところでございます。なお、千葉市は六月一日を千葉開府の日として定めておりますが、その二日後の六月三日というのは、実は本学園の創立者で千葉市の名誉市民でもある長戸路政司先生の命日なんです。この命日を私どもは敬愛の日と位置付けまして、創立者をしのび、また学園の建学の精神に思いを巡らす一日となっております。

こうしたさまざまなことを背景に、本学園ではこの度、学園創立一〇〇周年と千葉市開府九〇〇年を重ね合わせまして、学園創立

一〇〇周年記念事業の一つとして、この歴史シリーズ講演会を開催することになりました。今回が第一回目ということで、来年、再来年と計三回予定をしております。

この歴史シリーズ講演会を開催するに当たりまして、本学経済学部の高滝川恒昭教授、里見氏研究会の代表としても活躍をされておりますし、テレビ新聞等でもおなじみの滝川先生にコーディネートを願いました。そして千葉氏研究で著名な京都女子大学の名誉教授、野口実先生に基調講演者としておいいただきました。あわせて千葉県内の教育委員会に所属されていますお二人の先生から千葉氏研究に関連するご発表をいただくことになりました。基調講演の野口先生、ご発表いただく石橋先生、広瀬先生、どうぞよろしく願います。千葉の町の成り立ちやその礎を築いた千葉氏について示唆に富む有益なお話を拝聴できることを楽しみにしたいと思います。

参加をいただいた皆さまには週末の大変お忙しいところをご参加いただきまして、重ねて感謝と御礼を申し上げます。最後までお付き合い合いただくことをお願い申し上げます、簡単ですが開会のあいさつとさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

趣旨説明

滝川 恒昭 敬愛大学経済学部教授



ただいまご紹介いただきました滝川です。最初に、講演に入る前に私のほうで簡単にいわゆる導入といいますが、ちょっとだけご説明させていただきますまして、それから講演のほうに移らせていただきますと思います。いろいろ格好つけて言えば、歴史学というのは史料を基に過去と対話する学問であると言われております。ですから、私たちの学問は史料を基にした学問といえます。じゃあその史料というのはいったい何かといいますと、これは歴史研究の素材となる文献、遺物、文書、日記、伝承、絵画、建築などの総称と、こういうふうに辞書なんかでは出てきますが、ただし二応歴史家は史料のなかでも特に文書と記録に大きな価値を置いています。

たとえば千葉氏を調べようとしますと、まず史料をさがすわけですが、その史料をたくさん集める作業が必要になってきます。したがってそれをまとめる史料集というのが非常に重要になる、証拠集ですね。残念ながら今まで千葉氏に関しては証拠集、史料集というものがなかったんです。それで今、私どもは二〇二六年の千葉開府九〇〇年事業のなかの一つとして史料集を作るというようなことを行っております。二〇二六年の六月に刊行するということをやっておりますので、できましたらぜひお買い求めいただければと思います。

ただ、史料といいますが、一次史料と二次史料というのがありまして、残念ながら二次史料、後世にできた史料というのが現実的には圧倒的に多いんです。一方、同時代にできた史料というのは本当に少ない。しかし、その少ない史料を基にして語らなければいけない、こういうようなことが重要になってくるわけです。つまり史料批判ですね、これを厳密にやらないといい加減な歴史学になる。正直言いまして、私、今まで千葉氏

の研究はなるべく避けてきたんです。それは、良い史料がいろいろ集まっていなかったということもありますが、やっぱり後世作られた史料を使った研究がたくさん出てたんです。ですから、やっぱりそれはいけないということ、先ほども言いましたように今、証拠集を作っているということ、本当に楽しみにしていただけだと思います。

そして、今日の三名の方は良い史料を使って、それで研究している、そういうことをお願いした次第です。千葉氏はご存じのように、平安時代の終わりの頃から安土桃山時代まで続いた、約五〇〇年間この下総に広がった一族です。その五〇〇年間ですが、今日は平安時代の末から鎌倉時代あたりの話を野口先生に。そして、室町時代、室町時代の前半は南北朝時代というわけですけど、南北朝時代、室町時代、ここは千葉氏の研究の非常に手薄なところです。やっている人は非常に少ない。ここを石橋さんをお願いしました。最後の戦国時代から安土桃山時代にかけて、ここは史料が比較的多く残っていますが、実はこの時代の千葉氏の本拠地、本佐倉城というのが全面発掘されて、今、国指定史跡になっております。直接、発掘を担当した広瀬さんにその話をさせていただくということで、きょうは千葉氏の活躍した全時代を通して話していただくということになっております。

それでは私のほうの話はこのぐらいにしまして、野口先生の紹介をしたいと思えます。野口先生はこの千葉市出身で、出身中学は葛城中学ということで、この千葉の学校から大学に進めます。今は京都にお住まいですが、ルーツは千葉にあるといいと。それで、昔から千葉氏の研究をしており、千葉氏の研究が研究のルーツでもあるというようなお方です。ただし一時期、千葉氏の研究がいろいろあったもので、もう千

葉氏の研究から自分は離れると宣言をしております。いや困ったなど、何とか引き止めなきゃいけないなと思ったのですが、最近になってようやく、先祖返りということで、千葉氏の研究をいろいろやってくださいます。そういう成果を、今日、話していただけたと思います。

野口先生の研究は、日本のみならず東アジアのなかの千葉氏というような広い視点で語られるところがあり、これが他にはない研究じゃないかとも思います。私は幸い、野口先生と一緒に高校で、同じ日本史の教員としていた時代がありまして、そういうようなところから長い付き合い合いです。今日は野口先生の話、どういう話が出てくるのか、レジュメを見たのですが、過激なところもありますが、そこは野口先生らしくいろいろまとめてくださるのではないかと思っております。

野口先生のお話はだいたい一時間二〇分ぐらいで、そのあと質疑応答の時間を作りましたので、皆さまぜひ、この機会ですから野口先生に直接いろいろ質問をされていいのではないかと思います。ただし今日のお話とは関係のない話は避けていただきたい。ときどきいらつしやるんです、全然関係ない、自分のうちの歴史の話とか、そういうのを質問したりとか。そういうことはないようにぜひお願いしたいと思います。それでは野口先生、ぜひよろしく願います。

【基調講演】

鎌倉幕府の展開と千葉氏 ―常胤から頼胤まで―

野口 実 京都女子大学名誉教授



ただいま滝川先生からご紹介いただいた野口です。今、ご紹介いただいたように中学校は葛城中学校で、その前は鶴沢小学校。学区外ですが、実はこの辺に住んでいました。モノレールの天台駅の近くに市営住宅がありまして、そこに幼稚園から中学二年まで住んでおりました。だからしばらくぶりに舞い戻ってきたら全然風景が変わっている、というふうな感慨がなきにしもあらずというところでございます。

滝川先生とは鎌ヶ谷西高校で一年間ご一緒させていただきました。千葉氏の研究をしている人間と里見の研究をしている人間が一年間一緒にいて、そのときの教え子がどういう日本史に対するイメージを今、持っているのか。そのときの教え子って幾つぐらいになっているんでしょうね。結構いい年になっていると思うのですけれど。あの当時、私たちに教えてもらった日本史を彼らは今どういうふうに理解しているのか非常に关心的问题のあるところです。

私、千葉に、そういうわけで三五才ぐらいまでいたのかな。そのあと京都に三年ほどおりまして、それから鹿児島に五年、そして今、京都に二〇年以上になりますけれど住み続けています。ただ、家はまだ千葉にもありまして、親戚というか一族が住んでおりますので、たまに戻ってきたりしております。最初住んでいたのは、幼稚園生になって天台の辺

りに引越すまでは今の郷土博物館のすぐ近く。ですから、いのはな（亥鼻・猪鼻）山って皆さんご存じだと思いますが、あそこが遊び場でした。そんなことで千葉氏に対する関心を持ったのです。小中学生ぐらいのころまでは歴史ばかりやっておりまして、それで高校は、親は千葉高校、かつての千葉一高ですね、地元の方はなじみ深いと思いますが、そこに入れたがつていたようですが、私は千葉東高校に入りました。千葉氏のことばかりやっていたので勉強ができなかったって、言い訳になりますけれど。西千葉駅のすぐ近くにある東高校というところに。「三高」なんていつていましたね。千葉一高が千葉高校で、千葉女子高が二高なんですね。三高っていうのは背が高く収入が高くて高学歴での三高だということですけれど、そうじゃなくて、当時はあんまり勉強のできない連中が行くって。そんなことをいう卒業生ってわれわれの世代ですけれど。このころは立派な進学校になったようなので、若い卒業生は千葉東高にプライドを持っているみたいですが、私のころはそうでもなかった。だいたい仲間も老いばれていますから、少し悪口を言っても大丈夫なので、そんなこと申しあげています。

さて、私自身の話、それで二時間半していると大変なことになって滝川さんに怒られちゃいますから、本題のほうに入ります。レジュメを見てください。立派なレジュメを作ってくださいました。それで、『鎌倉幕府の展開と千葉氏』というタイトルでの部分からです。今日の話のストーリーについては六ページ分あります。ばらばら見てください。最後のページに参考文献、つまりこれを読んでいただければみんな分かっちゃうぞ、野口なんか来なくても良かったなみたいなことになると思うんですけれども。それからそのあとに資料がございます。本当は資料を見ながらこの

レジュメの部分と対照させながら話を聞いていただければ。こういうパワーポイントなんか使ってお話するのも手なんですけども、私はこれ苦手として、授業は日本の話芸の一つであるっていう変なことを私のモットーとしておりますので。（本当はパワポを作るのができないだけの話なんですけど。今、高校生あたりでもパワポで発表します。）資料を見ていただきながら話を聞いていただきたいと思います。ですから、地図とか系図なんかは本当だったらこれ、はがして脇に置いていただいて見ていただいたほうがいいんですけれど。

さて、話の一番最初、レジュメの最初のところ、講演の目的って書いてあります。一応こういう話をするぞって滝川先生にご依頼いただいたときに提出したものをそこに書いておいたんで、そのとおりになっているかどうか分かりませんが、まず千葉氏の成立から滅亡にいたるまでを概説する。成立っていうのはいつか分からないです、実は。系図なんか見ますと、もう平安時代の平忠常の子どものあたりから。平忠常っていうのは一〇二八年に房総半島で反乱を起こした人物です。ちょうど藤原道長が死んだ翌年に反乱を起こしています。

今、大河ドラマでやっていますね。ずいぶん道長のイメージがテレビの影響で変わったんですけれども。今年大河ドラマはよくできています。あれ面白くないって言うてる人は戦国時代が好きなおじさんばかりです。非常にしっかりと時代考証をしているし、それからエピソードも、『源氏物語』のエピソードを使っているところもありますが、みんな『小右記』とか『御堂関白記』とか、当時の貴族の書いた日記のなかに出ているエピソード。実資が、女房の、彰子（しょうし）の、つまり彰子（あきこ）っていうふうには大河ドラマでは言っていますが、道長の娘が子どもを産みま

すよね、のちの後一条天皇。その五十日（いそか）の儀のときに貴族たちが集まって、そのときにロバート秋山の演じる実資が女房の十二単を一枚一枚さわっている。あんなのちゃんと史料に出てるんです、あれ使ってる。倉本一宏っていう国際日本文化研究センターにこの三月までいた先生が時代考証をやっている。非常によくやっているとと思う。脚本家も頑張ってる。

二年前に私が専門にしている時代の大河ドラマがありました。なんだけ『鎌倉殿の十三人』でしたね。上総広常を佐藤浩市ですか、三國連太郎の息子さん演技しましたね。字が書けなかったりなんかして、武衛（ぶえい）、武衛って言ってたあれです。あれの時代考証もまあまあですけれども、たとえば、頼朝の前に集まって、侍所に御家人が集まって一堂に会しているなんて場面は、あれ戦国時代の大名の家と同じです。ああじゃないです。ずっと二行対座って、侍所ってすごく長い。それから侍所に身分規制があって、頼朝が正二位なんという地位になると、大納言ですけれど公卿ですから直接会えないです。すだれが下がります。何しろ、この千葉氏についてもですけども、中世後期、つまり戦国時代、江戸時代の武士のイメージで平安時代や鎌倉時代の武士を見てもうと大間違いである。左衛門尉だとか何とかって、そんなのどこにもいるじゃねえか、何とか兵衛なんてどこにもいるじゃないか、と思っちゃうと、この時代は大間違いだ。この時代って、平安とか鎌倉ですね。ちゃんと兵衛尉とか左衛門尉とかという官職が機能しているんです。要するに前提になるような能力がないとその地位に就けないんです。そういうことを無視して、ただの名前だよ、吉良上野介の上野介と同じだよと江戸時代のように考えてはいけない。江戸時代なら上野介だからっていつて群馬県の県庁にいて威張ってるってわけじゃないですよ、県庁じゃないですけど、国衙で

に取っておく性格なんです。だから、『平家物語』を先に読んで、格好いい源氏をあとに読もうと思って、平家を読むよって。で、次にもっと楽しいだろうと思って『源氏物語』の本を開けてみたら、何か十二単のお姉さんの絵がいっぱいあって、なんだこりやって捨てたことがある。そのくらい私は武士が好きだった。貴族は大嫌いだった。でも勉強したら、こんなじいになるまで勉強したら、武士と貴族ってそんなに違わねえじゃねえかと思った。だいたい鎌倉幕府の将軍っていうのは同時に大納言とか右大臣とかお公家さんですよ、上級の。それはそれなりに遇されてたんですよ、ということです。

何だか話がまた飛んじやいましたね、滝川さんに叱られちゃうんで元に戻します。講演の目的、今話したようなことも一つの目的なんですけれども、千葉氏を理解するときに、そういう発想を持っていたきたい。千葉開府なんてころの千葉氏というのは、そういう時代の武士だった。だから千葉常胤が家来を集めて大広間でこのやろう、俺たちは千葉氏だぜ、頑張ろうぜ、千葉六党なんてのがあって一族はみんな俺の言うことを聞くんだぜってんじゃないかってこと。もう結論を言っちゃったみたいなき感じになっちゃいましたけれども。反発を感じてる方もいらっしやると思いますけれど、千葉氏ってのはそんなじゃない。いつも月に星の紋章の下にみんな団結してるのだ、立派な一族なんだ。なのになんであの野口ってやろうはって思ってる方もいらっしやると思いますが、私はそう思っているということです。

講演の目的のところ、そういうことで、一応、千葉介家という、要するに下総国で天正一八年まで、一五九〇年ですね。小田原北条氏と一緒に滅びた千葉氏、千葉重胤とか直重とかって言われている世代ですけれ

すよね。そういうことです。だから時代考証って結構大事なのです。ただ、戦国時代が好きなおじさんたちが、その時代の発想と価値観で、たとえば女性、ヨヨヨと格好いいお兄さんにすがりつくみたいな、そういう形で描かないと見てくれないんですよ。NHKも視聴率を稼がないと怒られちゃいますから。だからそういう形で脚本が作られたりしてるんですけども、実はそうではない。

特に女性の立場、女性の地位なんてのは、全く中世前期と中世後期では相当違います。差別の問題もそうです。非人、人にあらざる者を非人って言いますが、人より下になっちゃってしまふ、差別される側になっちゃってしまふ人というのは中世後期以降。それ以前は差別もされるけれども畏怖もされる、怖い、すごい、何かパワーを持っている。陰陽師（おんようじ）なんかもそう。今、陰陽師（おんようじ）って言いましてけど普通は陰陽師（おんみょうじ）なんて言いますよね、映画とかテレビ。あの陰陽師（おんみょうじ）っていう言い方も最近誰かさんが作った言い方です。平安時代の陰陽道の専門家に聞くと、おんようじ、おんやうじ。清少納言の書いた『枕草子』にもそう書いてある。だからそういうふうにいるいろいろイメージが作られる。それから武士は貴族と対立するっていうイメージも間違い。間違いじゃないよっていう研究者もいますけど。間違いです、私は間違いだと思う。

そういう私は千葉にいたころ武士が大好きで、貴族ってのは気持ち悪くてしょうがなかった。鶴沢小学校の図書館に行くと、『平家物語』と『源氏物語』と置いてあって、平家と源氏ってのはもう武士のことだと思っていました。平家は滅びるから悪いほう、清盛って悪いやつだ、アッチ死んで死んだ。ところが源氏は格好いい、義経とかね。私はいいいものをあと

ども、そこまでが千葉氏の時代。それからあとあったんだったという方もときどきいるんですよ。子孫がいるんだとか。子孫がいても、別にそれは歴史的に活躍してなければそれはないに等しいので、歴史学では。だから問題にしないだけの話です。

です、その一五九〇年までの間の千葉氏の話をまず最初にしよう。で、「はじめに」ってところに話を進めます。千葉氏とは何か。資料の一とか二とかを見ていただくと、資料の一には系図が出ております。それから二には、千葉氏の活動したエリア、房総半島をはじめとして関東エリアが描かれています。一二世紀から一六世紀まで一族がいろんな地域に展開していますけれど、ここでお話するのは、千葉介と称した下総の守護を歴任した一族っていうことになります。ルーツは桓武平氏ということに伝えられています。

これを疑って、桓武平氏ではないぜ、勝手に冒称したんだっていうふうなことという研究者もいます。それってどういうことかっていうと、血統を天皇や貴族に求めることに反発をするような研究者もいるんですね。歴史っていうのは在地を重視しなきゃいけない。あんまり京都だとか家柄とかを重視するべきではない。そういう人たちっていうのは貴族と武士は対立してるんだ、階級闘争的に歴史を見る、そういう主観の方たち。戦後の歴史学者は結構多い。莊園なんか在地構造ばかり研究してるような人たちにはそういう発想を持つ方が多いのですが、われわれのことを考えても、親のまた親、そのまた親ってずっとさかのぼっていけばとんでもない数になるわけですよ。その上に、たとえば有力なものに系譜を結び付けたほうが自分にとって有利であったりとか、実際に婿養子だとか、あるいは姻戚関係を結ぶってことは当然あるわけで。だからあんま

り疑う必要はないというふうに私は考えています。

千葉氏のルーツはどうかっていうと、桓武平氏なんですけれども両総平氏という一族。両総というのは上総と下総です。房総ではない。何で房総って言わないかっていうと、要するに安房国にはちよつと系譜の違う一族が入ってるんです。同じ桓武平氏系でも良文流ではない。つまり両総平氏っていうのは、最初に言いましたけれど、平忠常の子孫の系統です。

その平忠常の子孫を両総平氏というんですけれども、系図を見ていただくと、この資料の一では常胤からしか書いてありませんが、資料の三に両総平氏の系譜が書いてあります。その子孫が一二世紀、劇的に発展しています。つまり忠常の子どもたち、子孫は討たれなかったわけですから。今年の初めごろ、「英雄たちの選択」っていう番組に出てくれて言われて出たんですけれども。滝川先生も去年出ておられて、そのあとちよつと「刀伊の入寇」の回に出て、そのあとまた頼まれて出たんです。その放送の中で平忠常が降伏してきたのに、その子どもたちがまだ地元でまだ降伏してこない。それをどうしようか、いしみの山、今の大多喜とかいすみ町とかあの辺りにこもってるんですね。それを追討する軍勢を派遣するかしないかどっちにしましょうかなんていって。追討する人は手を挙げてくださいなんていう、面白い番組ですよ。そんなのありましたけれども、結局追討されなかったんです。そのまま放り出された。その結果、忠常の子孫っていうのは在地に発展を遂げて、そして両総平氏一族、そのなかから千葉氏とか上総氏とかっていうのが生まれてくるわけです。

一二世紀の初めになって、そのなかの一人である下総権介という地位にあった常重。下総権介っていうのは下総国の国司の一員です。下総国の国府は市川にあった国府台、今の和洋女子大の辺りですね。その、要

盛と書いている。和田と名乗っていても、三浦の一族の中で一番偉いやつは義盛だ。だから三浦義村は和田の乱のときには家長の地位を得るために義盛の敵に回る。たとえば鎌倉幕府体制のなかで、幕府からお金出せとか軍勢出せつてときに一族単位できますから。仲が悪いといういろいろ面倒くさい。ところが実態を見ると敵対したりなんかする。一族間抗争がしばしば発生していたのです。

だからこれもあとの話になっちゃいますけど、千葉氏が妙見信仰というので、一族はいつも団結してる、月と星の紋章のもとに。あれは千葉介家が一族を団結させるために、昔からこうだったんだったというふうなイデオロギーですよ。国定教科書みたいなものです。戦前、日本は神の国だ、天皇陛下のために死ぬんだ、それが日本人として当然の務めであるという教育したわけですよ。天皇陛下の御真影っていうものを掲げて、校長先生が教育勅語の一節を読み間違えただけでクビになったりとか、そういう時代があったんですけれども。そういうふうに作られた歴史というものは、後の人たちによってうまく利用される。

たとえば女性。昔、千葉のカルチャーセンターで教えていたときに、鎌倉時代の女性というのは領地も自分で持っていたし、結構主体性があったんだって話をしたら、聴いていた高齢の女性が、私が話をし終わったあと真つ赤な顔をして、私はだまされてしまったって言いにきたんですよ。びっくりしました。私、なんか悪いことしたかなって思いました。そうじゃなくて、彼女は若いころから、女性というのは夫や父親の言いなりになって、何か嫌なことがあっても何でも我慢して生きていくのが、それが立派な女性だと思っていた。昔からそうだと思っていた。昔になればなるほどそうだと。ところが野口先生がそうじゃない話をしちゃったわ

するに権介（ごんのすけ）、長官（かみ）、次官（すけ）、判官（じょう）、主典（さかん）って、一番偉いのは長官です。四等官制って高校のときに日本史をやって覚えてられる方もいるでしょう。権介っていうと、次官のまた代理みたいな、そういう地位に、地元の人間が採用されるんです。長官は中央から下ってくる、場合によっては知行国主がつく場合もあります、上に。その常重さんはそういう地位にあったんですけれども、どうもその人が千葉を本拠地に定めて定着した。それ以前はどこにいたのか、いろいろ説がありますよ。千葉開府九〇〇年記念でいろんな先生がいろんなことをおっしゃると思います。大椎だとか、大友だとか。それ以前も系図を見ると千葉つて名乗ってたっていうふうに書いてありますが、それは恐らく遡及（そきゅう）的に千葉つていうふうに名字をつけただけ。それ以前は分らない。一時的に千葉にいたかもしれないけど。相馬なんてどこも所領にしていました。相馬つていうのは相馬御厨、伊勢神宮領の荘園で、今の柏とか我孫子とかがその辺りです、取手とか。その辺りにも所領を持ってたんですね。まだ定着して一つの地域に住んで家を作り上げてない。家つてのはハウスではなくてファミリーという意味の家です。だから夫婦がいて、それが結婚して子どもがずっと継承していった同じ名字を名乗っていくつていうふうな体制にはまだきちんとってないんです一二世紀初めくらいの段階では。

ですから、ちよつと分かりやすい例でいうと、大河ドラマで三浦という武士が出てきましたよね、三浦義村。山本耕史つていう人が演じましたけど。三浦義村つていうのは北条義時と非常に仲良しだった。三浦義村は、じゃあ三浦の一族の家長だったかっていうと、実は京都の慈円という天台座主、今でいうと東大の学長みたいなお坊さんが、三浦の長者は和田義

けです、この調子で。女性にも財産権があったんだとか、母からも娘に領地が譲られたんだとか。だいたい北条政子さんはどういうふうに評価するんですかみたいな話をしちゃったわけです。そうすると彼女は自分の持ってた過去に対するイメージ、常識が崩れてしまった。自分が正しいと思つていた話が全部崩れちゃった。だからだまされてたつていうふうに言ってきたということなんですけどね。

正しい歴史認識とはすごく重要なことです。だから千葉開府九〇〇年のイベントをやるんだったら、その千葉つていうのがどういうところだったのか、客観的に認識して、じゃあ未来はどういうふうな方向に持っていくのか考えることに意味がある。千葉介さんとかつていう人がいて威張ってた。こんなに強かった、戦争やつてどこで勝ったつてんじゃないかって、ふうの人人々が千葉の町のなかでどういう生活をしていたのか。どんな苦しみがあったのか、そんなことも問題にすべきでしょう。結構それに対して回答を与えてくれる史料が遺ってます。さつき滝川先生の話がありました。いい史料が遺ってます。女性も活躍してますよ。すごいですよ。自分の権利をちゃんと主張してます。そういう史料あります。でもなかなか出てこないですよ、一般の話のなかで。千葉テレビなんかでそういう話を取り上げればいいと思うんですけど、視聴率稼げなくなっちゃいますからね。そういうのをどうやって視聴率を稼げるようにアレンジするかっていうのが腕の見せ所だと思つたんですけれども。

一二世紀の終わりに、常重の子どもの常胤、有名ですよ。この人が源頼朝の挙兵に加わつて大活躍をする、というのが次の流れ。それによつて千葉氏は日本列島各地に所領を得る。それまでは千葉だけだった。敬愛大学が全国展開するなんてことなるかもしれない。九州にも分校がで

きる、なんてこともなるかもしれない。それと同じような状況です。ちょっと信じられないかもしれないみたいな話だけれど、それが現実起きちゃったのが一二世紀の末です。だから今、日本中に千葉氏の親戚がいっぱいいますよね。要するに子孫と称してる人たちがいっぱいいます。すごいです。気仙沼の辺りに行くと、千葉さんだらけだったりする。一度行つてびっくりしましたけど、お墓を見たらみんな千葉つて書いてあって、何でだろうと思いました。江戸時代の幕末の剣豪に千葉周作がいますよね。北辰一刀流、何で北辰一刀流か。千葉氏の妙見信仰からきてるんです。そういうわけで、千葉氏は全国的な展開をするわけです。

その千葉氏一族のなかに二つ大きな家がありました。千葉介家と、それから上総千葉氏、後者は上総広常の立場を継承していました。さっき出てきましたけど、実は両総平氏一族のなかで一番力のあったのが上総広常。『吾妻鏡』という鎌倉幕府の編さんした史料を見ると、頼朝が挙兵したときに二万の軍勢を率いて頼朝に加わった。千葉常胤も同じぐらいかたと私は思ってたんですけれども三〇〇。子どものころ、面白くねえなと思っただけでね、千葉の人間としては。何だ、上総一宮のほうがすごいじゃねえか。睦沢町とか上総一宮の辺りのほうがすごい大勢力を持つて、県都千葉の武士はたった三〇〇かよって、子どものとき思ってますごく嘆いたりしたんですけれども。実際そのとおりなんです。だから両総平氏一族の長は上総広常だったんですけれども、これが頼朝から肅清されて殺されると、功績のあった千葉常胤にその族長権が、そして所領のほとんどが、和田義盛と千葉常胤に継承されることになるんです。

それで、両総平氏一族のトップが千葉氏になる。その千葉氏のなかで

だから主體的にやっちゃってるんです。すごいですよね。そんな歴史がつて千葉にあったんだって、高校生ぐらいのときにすごく興奮したことがあるんです。

広常もそうですね。「なんじよう朝家のことをのみ見苦しく思うぞ、ただ坂東にかくてあらんに、誰かは引働かさん」というふうに頼朝に言つたと、頼朝自身が京都に上つてから後白河院に語っています。「なんじよう朝家のことをのみ見苦しく思うぞ」ってどういうことかというのと、「どうして朝廷のことなんかばっかり考えているんだ、あんた、見苦しいぜ」ってなことを頼朝に言つたというのです。そういう人物が房総半島にいて二万の軍勢を率いていた。これ、本当は半分ぐらいで、そういうやつを殺したんだから、私は朝廷に対して非常に大事な人物なんですよってことを宣伝するために頼朝が言つたというようにもとれるんですけどね。

だけど、何しろ千葉常胤はそういう行動をしたわけです。そのときに千葉常胤は頼朝を迎えに上総まで行っちゃった、今の市原。で、千葉を守っていたのが孫の成胤だったというわけです。そこに実は今の香取郡多古町の辺りに平清盛の義理の兄弟で、千田庄という荘園、多古町の辺りにあった荘園の領家判官代、藤原親政っていうすごい貴族なのに武士みたいなやつがいたわけです。結構家柄いいですよ。為光流藤原氏っていう、太政大臣藤原為光の子孫。為光の娘が大河ドラマにこの前出てきましたよね。花山法皇が通つた娘、それを藤原隆家が射ちやつたっていうあの事件を起こした。あの娘のお父さんが太政大臣藤原為光っていうんだけど、その子孫が千田庄にいたんです。これもあんまり地元の人たちは関心ないみたいです。鎌倉時代よりあとのお城の話とか武士の話は好きだ

も二つの流れができて、一つが千葉介家です。下総守護になります。それから上総広常のあとを継承したような形で、上総千葉氏が成立します。千葉常胤の孫に成胤と常秀がいます。その常秀が初代です。忠常以来の通字である常、これを名乗ってるつてところからしてもこっちのほう为本当は嫡流なんだろうなって気もしなくもないんですけど。成胤のほうが千葉介。これ「しげたね」って読む人がいますけど、それは後世に作られた本に「しげ」ってルビ振っちゃったんで、「しげたね」って書かれてますけれども、実は中世前期の史料を見ると「成」を「業」と書いているものがある。業は「なり」って読むんですね。それに胤つて書いて「なりたね」って読ませてる史料があるんで、「なりたね」ってよんだつてことは確かなんです。

その成胤の系統が千葉介家。千葉介家がその後ずっと千葉氏一族の中心になるんで、その成胤が一番ルーツだ、偉いんだぞっていうふうに思うようなお話も千葉氏は作ります。妙見説話。つまり、治承四年、一一八〇年に源頼朝が挙兵して房総半島に渡つてきて、狛島つてところですよ。北郡狛島つて。そこから北上してきて千葉に来るんですけれども、そのときに千葉常胤は下総の目代、国司の代官を襲撃するんです、平家側ですから。当時政府が平家ですから。だから平家を敵に回すつてことは反乱です。これ面白いことに、かつて郷土史家のなかには千葉常胤が反乱を起こすことはあり得ないことだという方がおられて、怒られたことがあるんですけれども。つまり国家権力についてる側がいつも正しくて偉いみたいな発想を持つてる方だったんでしょうね、それは、そうではないです。だから、千葉は今、保守王国なんですが、反権力的、反体制的行動をとつたわけです、千葉常胤は。しかもこれ頼朝が来る前ですよ。

けれども。その武士を配下に治めていた藤原親政っていう人がいたんです。すごい貴族なのに下総国に住んでいた。だから当時の多古町は、相当文化水準が高かったと思うんですが。その親政が一千余騎の軍勢を率いて千葉氏を討たなきゃいけない、自分は平家の姻戚ですから。で、来たんです。それを成胤が、お父さんやおじいさんはみんな上総に頼朝を迎えに行つてるなかで、それを迎え撃った。千葉に残つた兵力は本当に少ししかないのにそれをやつけた。何でやつけることが出来たかという、妙見神が示現した、神様が、妙見菩薩が降りてきた、雲に乗つて。敵の射た矢をみんな拾つては投げ返して、それに千田庄領家判官代親政の軍勢はやられちゃった。つまり千葉氏には神の加護がついている、その一番最初にすごいことをやつたのは成胤だ、成胤っていうのは千葉介家のご先祖さまだ、このご先祖さまの子孫たちに仕えるのが千葉氏にとって非常に重要、一族はみんなその千葉介家のもとに結集すべきであるっていうイデオロギーを中世後期の千葉氏が作り上げた。それが『千学集』とか、それから『妙見大縁起』とか、絵巻なんかにもし立てられている。その辺は千葉市郷土博物館の外山信司先生が非常に詳しい研究をされてますけれども、そういうことなんです。そういう本によって、あとになつて作られた話を前提にして千葉氏が今まで語られて来たんです。

本質的な史料には目を向けることもしなかった。千葉氏の記事は実は貴族の日記なんにもあるんです。だって京都でずいぶん活躍してるんです。

それからもう一つ、上総千葉氏、常秀の子孫ですね。これは滅びちゃうんです、一二四七年、宝治合戦のときに。

元寇の時代、蒙古襲来のころ、千葉介家というのは常胤の時代にいろ

んなどころに所領を獲得しているってさっき言いましたけれども、肥前国小城郡に所領を持っていた。今の佐賀県小城市ですね、羊羹で有名なところ、うまいですよ。お酒でも有名ですけど。その小城郡を千葉介家が所領に持つてゐるんで、千葉介の千葉頼胤は現地に行くわけです。蒙古が攻めてくるときに、九州に所領を持つてゐる御家人は九州に行かなければならなかった。で、頼胤が文永の役のときに負傷して、それがもつて死んでしまう。そのあと、頼胤の子どもの宗胤という人が九州に、肥前に行つてそのまま肥前に土着してしまふ、子孫が。下総と行つたり来たりするんです。この時代、中世前期の人たちっていうのは新幹線もないのに行つたり来たりしてます。戦国時代には同じ地域で領地を争つて、今のそれこそロシアとウクライナみたいに、ここまで領地取つたみたいないことやつてますよね。そんなことは中世前期にはあまりしてないんです。点を押さえる。所領が分散してるんです。で、動いている。その分散した所領から自分たちの年貢みたいなのを集める。その拠点として都市が必要だ。京都だつたり鎌倉だつたり。そういう割と資本主義的な、中世前期のほうが。そういう時代です。

ですから宗胤はしょっちゅう九州まで行つていた。千葉に宗胤寺っていう寺があります。今は千葉公園の近くにありますが、あのお寺、戦前までは都川の河畔にあつたんです。その宗胤という人が九州まで行つたりして、彼の子どもの胤貞っていう人は、大隅国の守護もしてます。大隅っていうのは今の鹿児島県の東部です。

室町時代になると宗胤の弟の胤宗が継いだ下総の千葉介家と胤貞の子孫の肥前の千葉氏は別になつちやつて、肥前の千葉氏は肥前国で展開する。下総の千葉氏は下総とか上総の守護にもなつたりするんです。この

辺りはあとで石橋先生が詳しくお話をされると思います。

その下総の千葉氏のなかでもまた内紛が起きる。享徳の乱つてのがあるんです。一四五五年ぐらいです。実は、千葉城というのはそれよりあとにできてゐるんです。あの猪鼻山のお城つて。今のあの天守閣はもつとあとですよ、昭和ですよ。私が高校生のころに建てましたからね、あれ。最初は郷土館つていったんです。観光課の施設だったんです。今でも使つてゐるのは私はちょっと解せないんですけども。もう、あれそのものが文化財になつちやつたから、しょうがないですね。みんな千葉城、千葉城つて言ってますが、中世にあんな天守閣なんてあるわけないですから。でも私が子どものころは、千葉常胤のころからあそこが千葉城だと思つてたんです。だから鶴沢小学校の教室の窓から、授業なんか聞かないで、あそこが城があつたんだと思ひながら妄想にふけてたんで成績が悪くなつちやつたことになるんですけど。

考古学の調査によれば一五世紀以降の遺構しか出ていないっていうのが、あの千葉城。じゃあ常胤のころの千葉氏の居館はどこにあつたのか。一番可能性が高いのは、当時の一般論からいかなきゃいけません、こういうとき。中世前期のころの有力な武士の居館っていうのは、実例を挙げると、たとえば足利氏、栃木県足利市に鐔阿寺つて寺がありますよね。あそこは足利義兼の居館の跡。常胤の時代です。一辺が二町、もう一辺が一町つて、京都の、要するに寝殿造りのプランみたいな形がベースになっている。しかも川沿いの低地でちょっと高いところですね。交通の便利なところ、陸路と水上輸送の両方を交差したようなところ。たとえば北条氏、北条時政の居館、伊豆の韭山、まさにそうですね。下田街道と狩野川の接点。非常にいい場所です。要するに伊豆の国一国を抑えられ

るようなところに拠点を置いてゐる。千葉氏の場合も都川水系を抑える

ような場所。候補地としては、たとえば今の千葉地方裁判所。後に徳川家康が御殿を造つてゐるのですけどね。あるいは来迎寺というお寺のあつたところ、千葉神社の東側です。九ページのところに資料五「中世の千葉町」って地図があります。これ見ていただくと、米印のところは県庁の場所です。皆さん地元の方だからお分かりですよ。都川もご存じですよ。千葉館つて書いてありますよね、もうここに決めちゃったみたいに書いてありますが、候補地の一つにすぎません。こういうところですよ。その右側の神明社とか熊野社とかつて書いてあるところの台地が、これが亥鼻山で、郷土博物館があるところということになります。

結局、享徳の乱のころのあとに千葉氏ではなくて、千葉氏の一族でも重臣だった原氏というのが、どうも亥鼻山に城を築いたようです。その城郭遺構の一部が今残つてゐる。ただ、あそこは江戸時代に海防上、佐倉藩なんかいろいろな施設を造つたりしたんで、相あいじられてゐると思います。だから発掘調査してもきれいに出来るのかどうか分かりませんが、実際にはいろいろ発掘調査で出てゐる部分もあるんです。それで、最終的にはそういう時代を経て千葉氏が再度分裂をして、そして中心になつてゐる千葉介家はもう千葉を捨てて、佐倉に移つてゐる。最初平山つてところに移動、それから佐倉に移るってことになるんですね。これが本佐倉、それは広瀬先生にこれからあとでお話ししていただくことになるわけです。

ずっと概説的に書いたことをお話ししているうちに、深みにはまつて全部話してしまつたことになるんですが、もう一度おさらいでレジメの二ページ

から、あと二〇分くらい大事なところをもう一回見ていきます。

まず千葉氏の成立と展開のところ、二ページのところを見ていただくと、もともと千葉氏というのは両総平氏の一員であつて、その両総平氏の本家本元は上総氏だった上総広常。上総氏っていう言い方も便宜的なんです。代々、上総権介職つていう官職を継承している家です。上総氏と言わないで上総介氏つていうふうに呼んでゐる研究者もいます。だから、かつては千葉氏が両総平氏の嫡流というふうに思つてゐた時代には、広常のことを千葉広常なんて書いてゐた研究者もいます。だけど実はそうではない。平広常つて言つたほうがいいのかもしれません。だから、いまだに、この段階になつても平広常だと。平つてゐるのは、つまりこれは氏（うじ）です。千葉氏も氏は平です。名字が千葉なんですね。まだ千葉とか何とかつていう名字が定着する以前、上総広常は滅びたので、これ、本当だったら地名をつけて玉崎とかね、玉崎庄つてところが本拠地ですから、今の睦沢町とか一宮町の辺りは上西門院領上総国玉崎庄なんです。

またついでに言つておくと、上西門院というのは女性です。後白河院のお姉さん。この莊園を本拠地にしてゐたのが広常です。それから千葉常胤のいたのは千葉庄です。八条院領です。八条院つてゐるのは後白河院の妹です。両方女性ですからね。こういう女性が莊園領主である莊園の下司、現地の管理人をやつてたのが千葉常胤とか上総広常であるつてことをちゃんと認識しておかないと、武士が大好きなおじさんたちは誤つた認識を持つてしまふことになるわけです。女性の地位、圧倒的に中世前期は高いですからね。財産権つていうことでも言いました、要するに貴族の世界でもそうだったということです。

それで広常が滅亡してからあと、さっきも言いましたけど、上総千葉

氏の系統がその立場を継承します。これは系図のほうに書いてあります。資料の一の系図を見ていただくと、常胤の子どもに胤正という人がいます。胤正っていうのは、「まさ」っていう字が正という字になったり、政治の政になったり、場合によっては將軍の将になったりします。

これも大事なことですけども、中世前期のころは、史料のなかで、音が同じだと同じ音の違う字を当てはめる可能性があるんです。だから、同じ字じゃなきゃ、これは同じ人じゃないかもしれない、市役所の戸籍課みたいなこと言っていると、中世前期は分かりません。フレキシブルなんです。いい時代ですよ。今なんか、ちょっとパスワードだとか何とかって間違えるともう駄目で、全部はじかれて、やり直しになってしまつて、私の世代からするとうとうという世の中になっちゃいましたね。若い人はそんなことないって言うかもしれないですけども。この時代は割とフレキシブル、漢字の書き順なんかないです。今は書き順でうるさい小学校の先生なんかもいます。全然違います。本なんていう字は、大きいって書いて中に十って書いてますからね。だからあんまり何か形式的なこと言っていると、世の中の文化って本当のところは分からないですけど、何か最近になってからやたらにうるさくなりました。

資料の一の系図を見ていただくと、成胤と常秀っていますよね。常秀って上総介って書いてありますよね。この系統が、実はこっちのほうが所領をいっぱい持つてまして。資料の六を見てください。そこにさっきちょっと千葉氏の一族が中世前期に、こんな日本中に所領を持ちましたよってことを言いましたが、それについての地図が載ってます。一〇ページ、千葉氏の地域間ネットワーク。全部じゃなくて一部しか載ってないんですけども。それから書き忘れてて、最近になってから分かったのがあるん

ですけれども、たとえば成胤の子孫は下総の守護と、それから伊賀国の守護を承久の乱のあとにもらう。伊賀は現在の三重県の北部ですよ。京都のすぐ近くです。

私、いろんなところに引越してまして鹿児島に五年いました。鹿児島に千葉氏なんて関係ないだろうと思つたら、千葉常胤は薩摩国の島津庄五ヶ郡郡司職を持つてるんです。大隅国にも所領を持つてるんです。中・近世の鹿児島と言つたら島津ですよ。丸に十文字で。新名さんとか、島津の研究をやってる人がいっぱい本を書いていますよね。千葉氏の本は石橋先生に頑張ってもらわないといけないんですけれども。薩摩や大隅の千葉氏の所領は、宝治合戦で滅びた上総千葉氏のほうに継承されてるんです。だから、上総千葉氏がもし滅びてなければ、薩摩国で島津なんかやつつけちゃったかもしれません。

それから上総千葉氏のほうは、上総国の守護職だけしか持つてないと思つていたら、承久の乱のあと丹後国。丹後ってお分かりますか。私、今、京都府に住んでるんですけど、また千葉氏に会つちゃった。京都府の北部ですよ、丹後国って今の。京都府に京丹後市つてのがある。あの天の橋立なんかのある宮津の辺り。丹後国、その守護を常秀から秀胤の世代まで。だから二五年ぐらひは丹後国っていうのは千葉氏の守護国だったんです。最近分かつたんです、史料が見つかつて。だからこの地図に入れてなくて申し訳ないんですけど。上総千葉氏がほかには九州のどこに所領を持つてたかっていうと、成恒領って書いてありますよね。豊前国、今の中津の辺りです。こんなところにまで千葉氏は所領を持っていたのです。

肥前の小城郡だけが千葉介家に継承された。だからこれはずっと続くわけですよ。肥前の千葉氏についても、これ面白いです、いろいろ。

最近また本が出たみたいですけども。結局鍋島に吸収されてしまいましたが、一五世紀のころ肥前国で相当力があつた。龍造寺とか鍋島が出てくるまでは、肥前国でほぼ中心的な、戦国大名ってほどではないのですけれども、力を持つてた時代がありました。

それからあと東北地方にもいっぱい。行方郡とか亘理郡とかつてありますけれども、これは千葉常胤の庶子たち、相馬師常とか、つまり常胤の子どもたちもそれぞれ独立した御家人として自立するんです。これは鎌倉幕府からそういうふうな掌握されています。こういう連中が常胤からもらつた所領を継承して、大名として残つたのは唯一相馬氏ですよ。それから伊達の家臣になった亘理氏っていう、武石氏の子孫もいますけれど、これも子孫だということ、さっきもちょっとい申しましたけれども、名跡だけ継いでるんで実質的には伊達氏から養子が入つてたりってことになるんです。

平安時代の下級貴族なんかは、養子をいっぱい取つてたんです。自分の家で家業がありますよね。そうすると親がやつたことを子どもがちゃんと継承できるかつていうと、歌舞伎の役者みたいに子どものときからずっと教育すればそれはうまくいくかもしれませんけれども、なかなかそうはいかないですよ。急に優秀なやつが出てきたり、ばかが出てきたりするわけです。そうするかどうかつていうと養子を取る。あるいは猶子、婿取りなんて手もあります。だから血のつながりで自分の子どもは何とかでつて、何か血統書付きのイヌやネコ飼うみたいにいるんじゃないんですよ、実は日本の社会つていうのは、本来は。ところが自分とちゃんと血がつながつて、しかも男系でなければいけないみたいな発想つていうのは、これ、天皇の継承問題なんかに関わってくるんでいろんな

ご意見をお持ちの方もいらっしゃると思いますが、実態はどうかつていうと、そういうことなんです、実は。天皇家はなかなかそうはいきませんけれど。

たとえば平清盛という人がいますよね。平清盛の家はもとと侍身分なんです。千葉氏なんかもそうだけど。そこから諸大夫身分に上がる。武家の棟梁なんかなれる身分に上がる。おじいちゃんの正盛が頑張る。忠盛、お父さんの時代になると諸大夫身分まで上がる。けどそこより上は厳然たる障害がある。というのは大臣には天皇の血を引く者とか、藤原氏の相当身分の高い摂関家とつながる者しかねない、そういう鉄則がある。そこで彼はこういう情報を流したかつていうと、実は自分は白河上皇の落胤である。そうするとみんな納得するわけです、本当にそうだったとか、うそだったとかじゃない、政治的意図なんです。それでみんなが納得するんです。

政治のやり方つてのはそんなんで、そういうふうなことを歴史からかなり学べる、千葉氏なんかからも学べる。だから誰の跡取りで、こいつは嫡流で、母方がなんとかで、正妻から生まれたとか。今でもネットなんか見ると、道長の正妻は誰だなんてやつてますよね。源倫子と源明子、源高明の娘のほうは、これは妾だとか、何とかやつてますよね。あれはナンセンスで、道長の場合はあれ対対です。道長って偉い人で本当に、男としてなかなか立派な人ですよ。二人の正妻に対して対対に、両方とも非常に身分が高い。奥さんの家ですよ、土御門殿つてのは。倫子の家で、当時の貴族つていうのは奥さんの家から全部いろんな面倒を見もらえる。道長つて五男坊ですから、婿に彼を取った。穆子つていう倫子のお母ちゃんが、道長の婿取りに積極的だったようです。大河ドラマで演じているの

は石野真子だったかな。石野真子があんな役をやるとは思わなかったですけどね、アイドルタレントだったので。若い人は知らないでしょう。

そういうふうなバックがある。時代的に違うんですね、状況が。日本の昔って、もう十把一絡げにして、みんな昔はこうで日本はこうだと思っちゃうと面白くない。特に女性は、何か昔になりやなるほど日本の女の人は大変だったみたいに関わりますが、それは違います。

これはちょっとレジュメから外れちゃいますけども、中山法華経寺の日蓮遺文紙背文書のなかに「胡蝶陳状」っていうのが文書として残っている。中山法華経寺って市川にありますよね、日蓮宗の。そこに日蓮の書いたものが残っていて、それは日蓮宗にとってはとても大事ですから、ずっと大事に保存してあって、今、国宝になってます。私の勤めていた大学は仏教系で、その宗教・文化研究所ってどこに所属してたのに非常に口幅つたいんですけど。裏側に書いてあることのほうに興味があるのです。裏側って、つまりつまり当時日蓮さんはどういうふうにして自分の勉強をしたかっていうと、千葉氏に勤めていた富木常忍という千葉氏の吏僚ですね、お役人がいた。文筆官僚。役所だからいろいろ紙がいっぱい溜まりますよね、書類が。この人が日蓮の信者で、日蓮に勉強するために、これ使ってくださいって、日蓮に渡した。日蓮がここに書いた。それがのこされた。日蓮の書いた側を表にして表装されたので裏側になってずっと見られなかった。それを剥がしたら、当時千葉氏の守護所、今でいえば千葉県庁ですよ。に残っていたいろんな文書がみんな出てきちゃった。いろいろ面白いですよ、負債の話とか、千葉に酒屋があるとか、こんなのでみんな出てきちゃった。私が若いころは、千葉には何にも史料がない。小山などにはいっぱいあっていいなと思ってました。千葉で千葉氏の

トを企画するのも楽しいですよ。

本質的な文化的な活動ってことで思い出しましたが、鎌倉時代の千葉。きょう来てびっくりしたんですけども、今、千葉には千葉敬愛大学のようなこんな立派な大学もございしますが、私が若かったころは、競輪場があって、千葉東高なんかにいくと競輪に来たおじさんがハズレた車券を捨てて回って、掃除の時間になると車券の掃除に行くんです。学校の前までいっぱい車券だらけでしたから。やってらんねえよな、あんな酔っ払いの相手すんの、なんて言いながら、われわれ千葉東高の生徒は競輪場の掃除に明け暮れたわけですけども、競輪に来たあいう人たちもみんなそれぞれ生活があつて大変だったんで、あんまり悪く言えないんですけども。今は私も同じような境遇だなと思ってるんですが。千葉って文化的に駄目な地域だっていうイメージがありました。チバラキ県なんて言われてね、ダサいたまチバラキとか。東京は偉い神奈川は文化水準が高い、千葉は駄目だと。ところが鎌倉時代は違います。資料の九を見てください。道源とか了行という千葉寺で勉強をしたと思われる千葉氏一族出身のお坊さんが、中国に行ってお経を日本に持ってきて京都にお寺を造つたりとかしてるんです。若いころだいたい千葉寺で勉強してる。千葉のまちなかで活動したお坊さんの記録が残っている。文化としてすごいです。

こういう中世の千葉の文化を評価することもちゃんと千葉開府九〇〇年のなかに入れてもらいたい。千葉氏研究の課題、五ページのところに書いてあります。

ある程度お話したんですけども、三番の中世考古学、これはぜひ話さなきゃいけない。要するに考古学とか隣接的な、文献だけではなく

勉強するにはさっき言ったように、いい加減な史料だけでしか勉強できなかった。そうじゃなくて鎌倉時代の生の史料が出てきたんです。ところが今から四〇〜五〇年ぐらい前だから、私が三〇〜四〇ぐらいのときかな。その研究をいろんな先生方が進めて、「千葉県の歴史」のなかにも載ってますけど、まだやり尽くされてないんです。

だから滝川先生がさっき言ってましたよね、史料集。今度、それでいろいろと解明されると思うんですけども。そのなかに、千葉氏の領民が負債があつて借金があつて大変だから逃げちゃおうとか、税金が重くてやってられないとか。そういうことが書いてあります。それから、千葉氏の守護所に勤めていた女性が自分の持つてる財産について誰かから訴えられたことに対して言い返した陳状。裁判記録です。それが残ってる。それにこの女性の生い立ちや財産に関することが全部書いてある。胡蝶さんっていう名前なんです。胡蝶ってバタフライです。マダムバタフライのバタフライ。胡蝶、すごくいい名前ですよ。そういう名前の女性が、自分の財産権を守るために下総の守護所に出した訴状が残ってる。そのなかに、自分の下女が三角関係に陥ってお坊さんに頼んで相手を呪詛したとか。そんな話まで書いてある。生の史料です。だから当時の千葉のことよく分かるんです。

千葉常胤がどこで合戦してどこで勝って、これだけ所領を持つて何千騎率いたなんて話を好きになっちゃいけないとは言わないんですけども。でももつと市民的発想からすれば、千葉にかつてこんな女性がいて、六〇〇年も七〇〇年も前にわれわれと同じようなこういう悩みを持つて、それをどう切り開いていったのか。ほかにそんな史料ないんですもん、勇気が出ますよ。こういうところに予算を投じて、いろいろな面白いイベン

て仏教とか仏教美術ですね。仏像なんかも実はすごくいいものがあるんです、千葉には。そういったものも活用して、千葉氏については研究する必要があります。

四ページを見てください、千葉氏と京都つてところ。そのところで、鎌倉幕府成立前における千葉氏と京都の権門との関係。京都から来ましたので京都と千葉の関係についてちょっとお話ししたいと思います。

さっきもちょっと平忠常の話をしましたが、平忠常の乱つていうのは、房総半島でいきなり平忠常が反乱を起こしたのではなくて、つまり、単に受領の苛政に憤った忠常が反乱を起こしたというのではなくて、ちゃんと京都の情勢を見ている。要するに地方支配を都の貴族がどういうふうな発想でやっているかということを見たらうで、考えたうえで忠常は反乱を起こした。そこで思い当たるのが道長の死です。藤原道長というのは結構地方の状況に対して目を配っていて、こういう状況だからこういうふうにするばいい、税率はこれでいいみたいな、割と最初は厳しかったんですけど、現実を見て緩くしたりしてるんです。道長が死んでから、政府のやり方が変わっていった。それを見越す形でもって、忠常は反乱を起こしている。

ですから忠常は、京都の貴族と全然関係ないかっていうと、そうではない。平忠常の乱なんて史料なんかないよって言う人がいますけれど、ありますよ、いっぱい。京都の貴族の日記、あのロバート秋山の演じている藤原実資の書いた日記『小右記』、小野宮右大臣の日記だから『小右記』って言うんです。藤原実資はたくさんの情報を日記に残してます。あの人が日記を書いてくれたおかげで、摂関時代がよく分かる。道長も残しています。道長の場合は自筆の日記が残っています。京都の陽明文庫に。

それから、この時代には源経頼という人も日記を残しています。

忠常は、藤原教通の家人だったんです。藤原教通、道長と倫子の次男。頼通っていうのが長男でその弟です。正妻ってことになっている源倫子が生んだ。倫子、トモコって大河ドラマで言ってますね。それから、頼道とか教通の姉妹が彰子ですね。アキコって言っている。後の上東門院。大河ドラマでは、何だか大人しそうな若い女優さんが演じてますけれど、あの人は九〇まで生きて、日本の院政のベースになるようなシステムを作り上げるんです。晩年の道長に対しては、お父ちゃんの言う政治の方針は、これはおかしいです。直しなさい、なんて。道長が、はい、すみませんというようなことをやってるんです。面白い、上東門院。平忠常はその兄弟の教通の家人だったんです。

貴族の日記を見ると、反乱を起こしたら、夷隅の山にこもってね、京都のことなんか知らない、貴族なんか来たら斬ってやろうなんてんじゃなくて、しょっちゅう京都に手紙を送ってるんです。実はこういう事情で乱起こしちゃったけれど、どうにかうまく收拾してくれないかというような内容だったようです。

ところが、教通のライバルであるお兄ちゃんの頼通のほうは、常陸国にいた平氏の一族と関係が深く、それが実はもともと忠常と対立関係にあるんです。常陸平氏ってやつ。これ、伊勢平氏の平維衡なんかと結構関係が深いんです。

だから、これ何だか細かい話してるなってお思いだと思っんですけれど、何が言いたかったかというと、京都における政治状況とか、誰と誰が対立関係にあるか、そういうことを、それから国家の方針がこの時点ですどう変わったか、これを押さえないと、平忠常の乱は分からない。平忠常が

りなんかして。ヤブ蚊のいっぱいいるところに裸になって入って刺されたり、変な修行ですよ。そんな修行をした荒法師、文覚って、もともとは渡辺党っていう大阪の辺りにいた武士の人ですよ。それでお坊さんになって守護寺なんかを再興した人ですけども、そのお坊さんの弟子になった、胤頼が、常胤の六男が。大河ドラマに文覚って出てきましたよね。あの歌舞伎役者の演じたお坊さんですよ。頼朝のお父さん義朝のしやれこうべ持ってたね。あんたのおやじですけど平家を討ちませんかって言いに来た人。もちろんあれ、うそですけどね。あれは後に義朝の骨を鎌倉に、文覚の弟子が持ってきたって記事が『吾妻鏡』にあるんです。それを元にして作った『平家物語』のフィクションですけども。東胤頼は、そういう文覚に仕えて、頼朝の挙兵のときにすぐ活躍したりしている。それから常胤の子どものなかで、一人お母さんがちよつと違うと思われるという日胤っていう人。これ、三井寺（園城寺）のお坊さんになっている。

そういう人たちから京都の情報が入ってきている。だから頼朝が兵を挙げたら、これは平家を倒す側についたほうがいいだろう。反政府的行動をとつても、あとで損をしない可能性もあるっていうようなところで常胤は動いている。ただおじいちゃんが頭にきて、カツとなってやったんじゃないんですよ。そういうことが分かる。

もちろんそういうことによって、千葉に京都の文化が入ってくる。平泉の毛越寺みたいなお寺が、ひょっとしたら広常なんか、上総氏なんてすごい勢力持ってますから、睦沢町とか一宮町にあったかもしれないんじゃないかと、私は思ってるんですけど。中世考古学の仕事ですよ、これ。千葉にもあったかもしれない。

茨城県にはありますよ、日向庵寺って言ってね。行ってみてびっくりし

どこにいたかってことも大事ですよ、もちろん。だけど、平忠常ってのはこういう人で、こういう政治的・社会的背景を持ってる。そういうことを踏まえて考える必要がある。地元の話だけでやっちゃうと、私ももともと地元でやってたわけですが、事件が矮小化されてしまう。大変だけど、だからそのために大学に史学科があるんです。専門家が必要なわけです。歴史学、史料を読む方法論、貴族の日記ってのは読むのが大変です。ちよつとやさつとじゃ分かんない。だけど、もし、市史とか自治体史とかそれなりのことをやるんだったらば、やっぱりそれ踏まえないといけません。

そういう京都との関係というのを調べてみると、千葉氏一族はいっぱいある。たとえば、東胤頼っていう千葉常胤の六男坊は、若いうちに都に上って、どうも滝口なんかには伺候したようです。上西門院という、さつき言いましたけれども後白河院の、後白河院って大河ドラマでは西田敏行がやった。昔は滝沢修なんっていう名優がやったんですけども。後白河院のお姉さんって、上西門院。妹は八条院。お姉さん、上西門院の荘園が、さつき話しましたけれども上総広常の所領だった。その上西門院の女院庁に千葉常胤の六男が京都に行ってお仕えしていた。そこで文覚っていうお坊さんと知り合いになって、実は文覚のお父さんと最初知り合いになるんですけど、文覚って聞いたことありますか。昔はみんな『平家物語』ぐらいは子どものころに読んでいた。皆さんの世代、どうですか。私と同世代、駄目でしょうね、恐らく。『平家物語』って読んだことない。祇園精舎ってのは知ってるけど、文覚なんて聞いたって知らねえよって。われわれの上の世代はみんな知ってます。若いころに自分の愛している人妻を、夫と間違えて殺しちゃってお坊さんになって、那智の滝に打たれた

たんですけど、宇治の平等院と同じような建築のお寺が、浄土庭園を伴ったお寺がある。筑波山のふもとの辺り。あんまり知られてないですよ。そういう文化的なものがある。

それから、鎌倉時代以降になると千葉氏が京都に出掛けていって九州の領地でなんかトラブルがあったときには、京都で九州の人たちから意見を聞くなんてこともやってますし、大番役も務めてますし、それから京都のお寺を造るときにお金も出してますし、内裏の造営ですよ、閑院内裏が焼けちゃったときに修造するためのお金を出してたり。お金だけ出すんじゃないくて、ちゃんとスタッフまで用意しています。

そのなかに了行ってお坊さんがいて、これがどうも千葉氏一族の出身で、京都の九条家という摂関家にもお仕えして、法印というお坊さんのなかではトップクラスの地位について、中国から大般若経を日本に招来した。だけど鎌倉幕府転覆の謀議に加わって殺されちゃってる。建長の政変。こんなことやった人がいるんですね。

それから、次に五ページに道源って書いてありますけども、これはもうちよつとあとの人で、一二世紀より一四世紀になってからですね、一二世紀の末から一四世紀の初めぐらいの人で、了行は宋に行っただんですけども、この人は中国が元になったときに中国に渡って、やっぱりお経を日本に持ってきて、六波羅に那蘭陀寺っていうお寺を造った。京都の地図が、資料七、二ページにあります。それから了行とか道源っていう人が系図上どういうふうに位置付けられるかっていうと、その資料八に、系図のなかに探してみてください。四角で囲ってありますよね。左側のほうに了行っていますでしょ。千葉氏がずいぶん、常胤より前のころに別れた一族から出てる。原って名乗っている。

原っていえば、途中でまた違う一族から原氏が出てくるんです、千葉氏の嫡流から。道源は古い時代の原氏から出てる。「原」はやっぱり千田庄の辺りの地名ですね。香取郡。太平洋側って結構水運が盛んで、中世は文化水準が高いんです、上総なんかも。それから道源っていうのは、若いころ小見四郎左衛門尉って名乗ってた人で、出家して道源。鹿島神宮の浄行僧なんかになっていて、淡路国に地頭職を持ってる人、所領を持っていたりする。だから常総内海、つまり香取海ですよ。今の霞ヶ浦がずっと昔、広がった。香取海、ちょうど東京湾ともう一つ大きな東京湾みたいなものが、茨城県と千葉県の境にあった。だから、よく源氏は東国武士だから馬に乗るのが上手で、戦争やるのに海上戦闘は平家がうまいとかって言うでしょ。あれもうそですよ。海上戦闘は千葉の武士も強いんです。

ということで、系図を確認していただけたと思いますが、その右側に鎌倉時代の京都つてありますね。右が東です。鴨川が流れてるのが分かりますね、上から下に流れてるんです。左側のほうに条坊があつて、これ鎌倉時代。丸が付いているのが、これ、篝屋って言って、今で言えば交番みたいなもんです。交番よりもっと大きいです。五〇人ぐらいの武士が詰めてて、だから鎌倉時代の京都の治安つてのは、検非違使もありましたけれども、鎌倉から派遣された御家人たちが仕事をしている、「在京人」って言うんですけれど。御所はどこかっていうと、この当時は閑院つてところです。ちょっと上のほうにありますよね。二条大路の下のところ。鴨川の東側に、今、東山区と言っている辺り、京都女子大があるんですけれど、六波羅に鎌倉幕府の出先機関があつて、将軍の御所用意されてるんです。

鎌倉時代は、鎌倉が将軍のいるところで、将軍の御所は鎌倉にしか

身分についてもちゃんと考えなきゃいけない。王朝身分秩序を知らないで論じたらめちゃくちゃになっちゃいますよ。

それから史料は難しいものを使わなければいけません。難しいんですよ、貴族の日記は読めませんよ、そうそう、これにチャレンジしないと。チャレンジしたほうが絶対面白いです。それからあと歴史は本だけ読んで、字だけ見れば済んじやうかっていうと、そうはいかない。歴史資料は考古史料もあれば美術史料も絵画史料もある。ちゃんとやんなきゃいけない。

それからあと、何のために歴史やつてるかっていう現代的な問題意識ですよ。それがなくて自分がなくて歴史をやっても意味がない。歴史をやる主体ですよ。だから千葉市が開府九〇〇年のイベントをやるのに、こういう視角でもつて九〇〇年に臨もうと思つてるのか。まず市長さんがそれを述べる。ここから始まらないと。ただ昔のことを知って面白くて、チーバ君に鎧着せましたみたいな話になっちゃう。これ、まずいと思います。これはわれわれのつて、私はもう払つてないけど、私の親戚も払つてる千葉市に対する税金の使い方の問題です。皆さん払つてるわけだから。税金払つてるから言うこと聞けつてのは、すごいナンセンスですけどね、極論です。そういうことをすぐ言う人がいるんで、極論させていただきました。

それからあと宗教的な問題です。さっきからずっと言ってるけれど、妙見信仰で千葉氏一族はいつも団結してて、神さまが守ってくれてうちの先祖はこういう文書に名前が出ているから偉いんです、みたいなのはやめたほうがいい。これは相当客観性がないです。全然違った観点から、そういうふうな信仰になぜ地域の人たちが陥るのかっていう観点で、学問的

くて、京都には六波羅探題が派遣されてるんだ、事務所だけだよ、出張所だけだよっていうのが、高校の日本史で教えることですが、実は、京都に将軍が来たときのための御所がちゃんと用意してある。京都の貴族たちは、六波羅のことを「武家」って呼んでるんです。武家と公家。つまり六波羅っていうのが、「河東」とも言いますが、河の東つて書いて。だから、要するに京都の朝廷の下に幕府がある。国家の軍事警察を担当する。その親分が将軍ですよっていう意識なの。だから、鎌倉と京都は対立するんだ、みたいに考えちゃいけないってこと。そんなこと、そういう枠のなかで千葉氏というのも存在してただってことをご理解いただければと思います。その六波羅の空間に那蘭陀寺っていうお寺を道源さんは造っている。

それから「おわりに」のところに、これからの千葉氏の研究でこういうことやっていただきたいって、まとめてみました。途中で縷々述べましたけれども、脱線しながら。さっきも述べたとおり、まず広域的な視角が必要だ。千葉だから千葉のこと、よく、自分は地元のことをやっているのだから郷土史だけでいいんだと言われるのですけれども、千葉で中世前期についての郷土史をやっている人よりも、その人が研究している、たとえば千葉常胤とか上総広常のほうが、京都のことを知っている。研究対象のほうが京都を知っているっていう状況がある。これ実際そうだと思う。自分の経験でもそう思いました。何かすごく狭いところで話していたと思いました。

それからあと女性を大事に見なきゃいけません。今と同じ感覚で江戸時代や時代劇みたいな発想で、男に従属するような女性を、日本の女性の立派な鏡なんて思っちゃいけません。

対象としてやるならいいかもしれませんが。

すごい嫌みを言ってますけどね、私。失礼なこと言ってるかもしれませんが。というわけで、失礼な話をしてしまいましたが、生まれ故郷でもありますし、先祖代々の地でもありますし、よそに逃げちゃった逃亡者でもありますけれども、千葉氏の研究者として、千葉市民の皆さんにお話をするっていうことと思うところを率直に申し上げさせていただきます。

質疑応答

質問者A いつもXでポストのほう拝見しております。勉強させていただいております。終わりに、の（三）のところの課題で、中世考古学墓所とありますが、〇〇の千葉氏の墓所の場所というのは、今、分かっているのでしょうか。」

野口 中世前期とか平安期っていうのは、割とあんまりお墓のところにこだわらないですよ。だから、それこそ藤原伊周が、今の大河ドラマでやってる摂関時代でも、伊周が流罪になったときに、自分のお父さんのお墓をお参りしようと思っただけで、どこだか分からないみたいな、そんな状況です。ですので、お堂を建てたり、土まんじゅうみたいなものを造ったのかもしれませんが、あまりよく分からない。

千葉氏については、さっきちょっと言いましたけれども亥鼻山の土塁の基底部から、どうも十三世紀の終わりぐらいの常滑なんかの蔵骨器が出て。だから、その時期にはそういう形でもって、要するに千葉氏の居館を見下ろすような、ちょうど平泉の藤原氏が中尊寺の金色堂を柳之御所を見下ろすようなところに造ったような、宗教施設があったのかもしれないが、分からない。それからあともう一つは、この大学の近くの園生ですね。園生に千葉山っていうのがあって、そこに何か土塁みたいなのがあって、大日寺という中世後期一四世紀、一五世紀ぐらいになってからかな。千葉神社の南側に、今はもう移っちゃって轟町、千葉東高の近くにあるんですけども。そこに五輪の塔がいっぱいあるんですが、それが実は園生にあって、そこ千葉山が本来の千葉氏の墓所だったという説も

んなことを訴えて、もしなんだったら参加していただきたい。

質問者B

早稲田大学二年生のイトウと申します。大学に入ってから野口先生のXを見させていただきまして、そこから千葉氏に興味持ったんですけども。一点質問がありまして。一年生の授業で論文ですとか著書とかの探し方がある程度分かったんですけど、野口先生がいつもおっしゃってるのは、京都の一次史料とかの探し方がまだ分かってなくて。もしよろしければそちらのほう教えていただきたいんですけども。」

野口 何か滝川さんがさっき言った、この講演会の趣旨とはちょっと外れて、京都にある一次史料の探し方。これは一次史料っていうのは貴族の日記等ですけども、たとえば歴史館に行ったことありますか、京都の。

質問者B

「ないです。」

野口 行けばいいですよ。行って職員に尋ねて、私はこういう史料がほしい、ここに来ればあるって聞いたと言えば出してくれますよ。あと貴族の日記はもう翻刻された活字になってるのがいっぱいあるわけですから、それに立ち向かうとか。私も大学院のときそうだったんですけども、自分の大学で講座がなかったり史料を読む会がなかったら、よその大学に行って先生を訪ねるんです。私は青山学院大学ってところに授業料を払いましたけれど、貴族の日記について教えてくれた先生は東京大学とか学習院の先生でした。だからあなたもそうしなさい。

あります。だからそこも発掘調査やればいいと思ってるんですけど、やらないですね。なんか考古学やってられるんですか。」

質問者A

大学時代に学んで、あとは離れていた。ウォーキングコースにちょうど今お話しした星宮塚墳墓群があったので、ちょっと興味がありました。

野口

その園生の千葉氏のお墓については、千葉山についてはいろいろと、それこそ郷土博物館の方に伺えば資料等いただけると。あと、それから以降の墓所については、大日寺とか中世後期にもありますけど。そのところ、どうなんでしょう。あと、本佐倉城の近くには勝胤寺、それから幕張の辺りにも海隣寺とかあって、それが今の佐倉市に移ったつてもありますけど。ただ、戦争のとき、第二次世界大戦のときに千葉が空襲を受けたことで、大日寺とか来迎寺が戦後移った。移ったときに五輪の塔は持つて移動してるんですよ、この辺に。ところが下のほうまで掘ったのかどうかとってのが分からないんです。

この場に千葉市の教育委員会の関係者がいるのがわかっていて、申し上げたいのですけども。今までは、千葉市の埋蔵文化財行政は加曽利貝塚がメインです。加曽利貝塚は非常に重要ですけども、歴史時代の考古学もぜひやってもらいたい、発掘調査です。そうすると相当いろんな生活痕跡が見つかるのではないか。幸いにも千葉の旧市街っていうのはまだ小さな住宅しか建ってないようなところも結構あるんですよ。幕張みたいなビルが建ったらもう終わりです。アウトです。ですからぜひ発掘調査をやってもらいたい。私など、千葉をふるさとしてますけど。ふるさとのシンボルが何も無い。鹿兒島に住んだとき、鹿兒島の人をすごくうらやましいと思いました、桜島つてのがあって。なので、ぜひそ

南北朝・室町期の下総千葉氏 ―その危機と発展をめぐって―

石橋 一展 千葉県教育委員会

発表者紹介 滝川 恒昭

それでは私のほうから石橋先生を紹介させていただきます。
最初にも申し上げましたとおり、千葉氏の研究というのは、やっぱり日本史上にいろいろ足跡を残した鎌倉時代が番盛んと言ってもいいと思います。そして次には史料が比較的多く残っております戦国時代の研究。そしてその中間にあります南北朝・室町期の研究というのは非常に遅れています。そのなかで今日話をしてもらいます石橋先生は、精力的に研究を進めていまして、南北朝・室町期の千葉氏に関係する論文をたくさん書いております。今日は最新の研究成果、それと新しい史料を用いてこの時期の千葉氏の実像を明らかにしてもらおうということになっております。ではよろしく願います。

ただいまご紹介に預かりました石橋と申します。改めましてよろしく願います。

先ほどお話された野口さんは、千葉で生まれ千葉で育ちということろなんです。私は千葉に来て二〇年くらいです。歴史の研究をその間続けているのですが、ちゃんと千葉一族のことを勉強しないと駄目だよっ



ていうふうに言われたのが一五年くらい前で、しっかり皆さんに恩返しをするという意味でも、勉強して還元していければいいかなというつもりで勉強しているところです。きょうは、本当にわずかなのですが、自分が勉強してきたことをお伝えできればいいかなと思いますのでお付き合いいただければと思います。

自分のタイトルは『南北朝・室町期の下総千葉氏 ―その危機と発展をめぐって―』と付けました。自分の講演時間は四〇分なのでちよつという端折っていききたいと思うんですけど、「はじめに」につきましては、チラシにも書いたこういうお話にしたいですよということなので、ちよつと端折っていきます。

まず、謎の多い南北朝・室町期の千葉氏というふうに書きました。先ほど、野口先生の大変示唆に富んだお話をいただきましたが、鎌倉期千葉氏というと、すぐに常胤が出てくると思うんです。『吾妻鏡』に、他の史料もそうですけども、その活躍が見られると。自分の、私のあとにお話をしてくださる広瀬先生の時代、戦国時代も、たとえば本佐倉城、千葉孝胤とか、勝胤とか、そして千葉胤富とか、小田原北条氏と結んで里見氏らと戦うっていうことで、非常に有名な当主がいっぱいいるんですけども、じゃあ南北朝・室町期の千葉氏ってたくさんどういう人がいたか言えますっていう人は、あんまりいないと思うんです。よく分からない。

そのよく分からないことのひとつが、先ほどのお話にもありましたけれども、史料の問題です。たとえば戦国時代、黒田基樹さんという研究者が、千葉氏の当主、お殿様が出したお手紙、文書を数えました、約一〇〇点。対する南北朝・室町期、千葉家の当主の発給文書五〇点。約半分、も

うびつたり半分です。これだけ見ても、南北朝・室町期の千葉氏の史料が少ないぞっていうことをお分かりいただけるんじゃないかなと思います。なので、研究してる人もなかなかなくて、僕、この南北朝・室町期の話をしてくださっているのを、よくありがたくお願いされます。たぶん研究者があんまりいないからだと思うんですけども、ここに来た方も、実は私の話を何回か聞いていて、またおまえかというふうに思われてる方もいらつしやるかもしれませんが。

ただ、この南北朝・室町期と一言に言っても、建武の新政が本格化したのが、たとえば二二二三年、建武元年だとして、享徳の乱の中で、千葉が分裂するっていう話を今、野口さんがちよつとお話されていました。それが一四五五年だとすると、その間二二〇年くらいですか。これをバーツと話すと、つまり有名なじゃない人がいっぱい出てくるなかの話をバーツと話すと、何か面白くないんです。分かんなくなっちゃうんですよ。前もどこかで、この時期の話をしてくださいって言われて、私、一生懸命話したんですけども、休み時間にトコトコとお客さんがいらつしやって、先生、「胤」ばっかりで誰だか分かんねえよって言われちゃったんです。なので僕は思いました、そのときに。たぶんこの話をただずっと通史の話にしても面白くないんだなと思ったので、きょうは、一応タイトルにも挙げたんですけども、その危機と発展をめぐって、つまりピンチとチャンス、この二二〇年のなかには常に順風満帆じゃないんですよ。駄目なときもあるし、いいところ、いいときもある。ダメなときもある、ピンチのときもある。その危機と発展に焦点を当てて話をしようというふうに思いました。だからいわゆる通史はちよつと時間的にも内容的にも厳しいので、通史の話はなるべくしないようにしようかなと思います。一連の流

れを追いしたいという人は、ぜひ千葉県史をお読みください。そこに詳しく書いてありますので。

ということでもちょっと見ていきたいと思います。その噂の胤がいっぱい出てくる人たちの登場人物と花押、サインをバーツとレジメ二三ページから一四ページにかけて載せておきました。これは、そのときそのときで一応紹介させていただきまして、ここには一覧表で当主の名前、千葉貞胤から始まって、ずっとその一四ページの胤将というふうに呼ばれる人まで書かせていただきました。一応没年も書かせていただきました。千葉氏って結構若くして亡くなる当主もいるんだなって、鎌倉時代もそうでした。このあと広瀬さんも戦国時代のレジメで没年を一部書いていただいてますけど、見ていくと、結構若くして亡くなっちゃうんです。そういうのもなんかちょっと見ていただけると、いろいろ分かることがあるかなというふうに思います。そして二〇ページ、レジメの二〇ページに系図も載せておきました。毎回毎回は触れられないんですが、当主だけは太字で囲んでおいたかなと思いますので、そちらを見て参照していただきながら話を聞いていただけると人間関係と親子関係っていうのは分かるかなというふうに思いますのでよろしくお願いします。

さて、ただ、もう一つ、いつもやることがあるんですけども、南北朝・室町期の関東地方がどうなっていたか、詳しくこれも言える人あんまりいないと思うんです。鎌倉時代の関東地方は鎌倉幕府があったんですけども、戦国時代はいろいろ皆さん詳しくいらっしやると思うので、特に説明はいらないと思うんですけども、南北朝・室町時代の関東はどうだったのかっていうと、もう超簡単に説明すると、一四ページの花押が終わるあたりに二行で書いておきました。当時の関東地方っていうのは、南奥

ていうことでお含みいただければと思うんです。

次に各国なんですけれども、守護ですね。鎌倉時代も守護がありましたけれども、南北朝・室町時代も守護がいて、守護もこんな人たちが就任していましたっていうのを簡単に書いておきました。ただ、いろいろ変わるので、主な人しか、主な一族しか書いていません。当然、下総は千葉氏ですよ。他にも千葉氏、上総とか安房にも千葉氏という名前が出てきます。これはこの話のなかで説明します。青字で書いてあるのが、上杉氏のなかで最も有力だと言われる山内上杉氏で幾つかの守護を持っています。あとは皆さんたぶんご存じだと思うんですけど、常陸には佐竹氏、下野、今の栃木県には小山などの一族がいるわけです。相模は三浦、あるいは扇谷上杉、そういう一族です。こんな配置だったということもちょっと頭に置いていただければと思います。

さあ、じゃあいよいよ、「はじめに」は終わって、一のほうに入りたいんですが、南北朝時代の足利氏ということで、南北朝と室町とそして戦国の前半があるので時代ごとに三つに区切ってお話していきたいんですが。一族の内紛と克服というふうに書きました。早速、危機一です、ね、ピンチが訪れるわけです。南北朝内乱における同族対決というふうに書きました。これは郷土博物館が持つ千葉貞胤の像なんですけれども、千葉貞胤の花押も載せておきました。

貞胤の時代、同族対決が行われるわけです。南北朝内乱において、ちょっとさっき野口さんのお話にもあったんですけども、両派分かれて一族の戦いが始まってしまいます。一五ページの下の方に四角の上辺り、①②っていうふうに書いたんですが。鎌倉時代においては元寇をきっかけとして肥前のほうに千葉氏が行ったんだっていう話がさっき出てきましたけ

地方も含めていわゆる東国というふうに言いますが、ここを治めていたのは鎌倉公方って言われる人たちです。室町時代、南北朝・室町時代の将軍は足利氏。幕府はもちろん京都にあるわけ。鎌倉公方というのは足利氏の一門で鎌倉にいて鎌倉を中心に関東を治めていた人のことを言います。系図載せておいたんですけども。今、青で出てきたのが、これが六代目までしか書いてないですけど、室町幕府将軍の家系です。尊氏がいて、上のほうに一番尊氏っていう、尊氏の次の将軍が義詮。二の義詮です。義詮の弟に①基氏っていう人がいて、基本の基に氏ですね。この家系が、今、赤で出てきました鎌倉公方っていうふうに言われる家系です。四角で一列あって、左側に⑤古河へ成氏って書いてありますけれども、これが戦国時代に古河に移って古河公方っていうふうに呼ばれるようになる成氏です。この成氏ぐらゐまで、このあと古河公方続くんですけども、成氏ぐらゐまでが私の話す時代ということで、こういった人が足利氏の鎌倉公方が当時の関東地方を治めていたっていうこと。

その鎌倉公方を支えていた人たち、いろいろ武士がいるんですけども、レジメの一四ページ一番下に書きました。一番中心となっていたのが関東管領というふうに呼ばれる上杉氏の一族です。鎌倉時代は執権、北条氏が執権として将軍を支えていた。室町時代は管領というふうに呼ばれている細川氏とか斯波氏とかが幕府にあつては将軍を支えていたわけで、鎌倉公方においては、関東地方においては関東管領が鎌倉公方を支えるっていう図式が成り立っていました。これ細かく言うと、いろんな一族が就任しているんですけども、大まかに言って、上杉氏。いわゆる上杉謙信に最後つながるあの上杉氏が関東管領として鎌倉公方を支えていたということになります。こういう世界が、一応きょうのお話の舞台だっ

れども、下総にも千葉氏がもちろん残っていて、もともと嫡流であった宗家の家は、九州の肥前に行ってしまったので、庶流、弟の家系が下総に残って守護を継いでいきます。その家系が南北朝時代もその②のところに書いてあった貞胤と九州に行ったほうの家系は貞胤って言います。下総に残った家系が胤貞です。字が入れ替わっただけなんです。すごく分かりづらいですよ。胤貞のほうは、私も分からなくなっちゃいます。胤貞のほうは、千田、千田荘の千田ですね、のほうに勢力を置いたので、千田氏なんていうふうに呼ばれます。貞胤のほうは当然千葉本流を名乗るので、千葉氏これも分かりづらいですね。千田と千葉、貞胤と胤貞、こういう戦いが繰り広げられます。

元宗家である胤貞、千田胤貞は、便宜上千田と呼ばれますけども、千田胤貞は、南北朝の争いのなかで北朝の側につきます。つまり尊氏方ですよね、足利尊氏方。現在の本家である千葉貞胤は、南朝方。後醍醐天皇方ですよ、ここに付きます。そうすると何となく南北朝時代の歴史をたぶん学校で習っている皆さんは、おお、じゃあ北朝のほう優勢だから千葉胤貞が発展していくのかなと思われると思うんですが、その右の矢印を見ていただくと、最終的にはなんですけれども、最終的に、の前に、南朝が追い詰められていくので、その当時の宗家である千葉貞胤のほうが、北朝に降伏するんです。で、許してもら。そうするとやっぱりもともといた千田系のほうが優勢かなと思いきやなんです。なので結局、この戦いはそのあと千田系が勢力を失っていった、当時の惣領家であった元は分家だったけど鎌倉末期から惣領家となった千葉貞胤の家が栄えていく、千葉介の家として栄えていく、こういう流れのなかに

あります。

史料を出しておきました。一五ページの下のところです。これは、その同族間の戦いが千葉城を舞台にも行われたっていうことを示す史料なんですけれども、吉良貞家挙状というものです。挙状っていうのは、戦争をして功績があった人を、戦争して功績があると恩賞をもらいたいですよね。自分の配下にいた武士たちが恩賞をもらえるように、幕府とか有力者に推薦するのが挙状なんです。だからこれは吉良貞家っていう人が、誰かのことを推薦する、この人合戦で頑張ったのでご褒美あげてくださいねっていう文書なわけです。出してる先が仁木頼章なので、これも足利の有力な家臣。誰の軍功かというと、最初に書いてます。相馬出羽守親胤、これ千葉一族ですね。相馬系。申状一卷謹んで進覧これをせしめ候。相馬親胤の軍功について申し上げますという事で上げてるんですが、問題は、このなかで建武二年南北朝の、この先ほど言った争いのなかで、下総国、千葉城で合戦が行われたということがここに示されている。ですからこの辺りも、千葉城の辺りもこの一族間の争いのなかのただなかに置かれたということがここから分かる。じゃあ千葉城ってどこですかって話をさっき野口先生もしてくださいんですけど、今、玄鼻のお城は浮かんではない。もう野口さんのお話聞いたから浮かんではないと思いますけれども、あそこではなくって話を野口先生してくださいました。宗胤寺の話も出てきましたよね。宗胤寺ってお寺があるんだよっていうことで、私、今、県庁に勤めてるんですけども、県庁から出て、とこととこって歩いていって裁判所の前にパネルがあるんです。これ、千葉市教育委員会が作ってくれた。このパネルの絵を拡大すると、こっち県庁。で、橋渡って都川渡ります。ここにたまたに、私、いつも出勤するときこの川

したら途切れて、一回辞めてやって辞めてっていうふうになってるかもしれませんが、その幾つかの証拠が古文書から見取れます。伊賀の守護が終わったあとは、一四世紀半ばくらいまで遠江の守護にもなってます。伊賀の守護が別の者に代わるから、代わりになるということかもしれません。ですから下総の守護を持ちながらも、伊賀、遠江そしてその子ども、その下、書いておきましたけど、貞胤の子どもが氏胤です。氏胤も、伊賀の守護の動きが見られるので、伊賀の守護にも就任したのかな。そのあと氏胤は上総の守護にもなっているわけです。上総の守護の就任時期書いていたんですが、上総の守護も一回なって、またちょっと別の人がなって、佐々木氏っていうんですけども、近江とか京都に基盤を持っていた六角とか京極とかっていうふうには戦国時代に言われていく一族ですけども、佐々木氏になってまた千葉になってっていうふうには幾つか流れがあるんですけども、こういう下総以外のところにも鎌倉時代同様、守護を持っている。複数の国の守護を任されるっていうのは、かなりやはり幕府からの一定の信頼を受けていたっていうふうには言えるんじゃないかなと思います。なぜかというと、持てない人たちもいるわけですよ。鎌倉時代にかなり有力でも守護になれないっていう人たちもいるので、そのなかで複数の守護を持つて。かなり有力というふうには言っても良いというふうに思います。

これは、二回目の守護のときの史料なんですけど、ちょっとレジュメのところに打ち込んでおきました。古文書どういう内容かっていうのを打ち込んでおきました。これは上総国、今赤く丸が一番こっち側でついているのは上総国ですね。上総国市東郡の土地と、もう一つは同じ国の海北郡どっちも市原市だと思うんですけども、の土地についてのことについて千

を見るんですけど、魚いるかなとかって、たまにエイがいるんですよ。その話はどうでもいいんですけども。歩いていってここが裁判所で、ここにパネルがあるんですけども、野口さんもお話されてましたけれども、この辺りが有力地として考えられているということで、今は裁判所、地方裁判所の建物になってます。これは都川の橋の上から写した写真です。この辺りがお城だったんじゃないか。亥鼻城はもっこち側にあるっていう感じ。この辺で行われていた。先ほど、川の近くで、そして交通の便が良いところ。話がありましたが、まさにこういう。ということで一族内乱は、一応のところは克服された。これが一つのピンチ。

次にチャンスのほうに行きたいと思います。尊氏に降伏した千葉貞胤ですが、意外にも足利尊氏に大変大事にされる。副題で『伊賀上総の守護に』って書きました。伊賀って聞いて、あれ？さっき出てきたなって思ってた人は、野口先生のお話をよく聞いていた人で、鎌倉時代にも伊賀の守護に千葉氏はなってるんです。ところが南北朝時代にも。これは鎌倉時代の実績っていうのがある程度ここでやってたからっていうのも評価されてると思っんですけど、下総に、さっきもあつたんですけど、南北朝時代ぐらい、室町が始まるぐらいまでは、南北朝がまだ分かれてるころぐらいまでは、武士って基盤をたとえば東に置いていても、京都と行ったり来たりしたりとかしてるんですよ。たくさん遠いところに所領を持ったり。それがだんだん自分の周りに集積されていくのは中世の後期ぐらいからで、こうやって千葉も、幕府に仕えてるわけなので、伊賀の守護をやったり、一方で上総の守護をやったりする。レジュメのページは一六ページのほうに移っていただきたいんですけども、千葉貞胤が伊賀の守護になってるっていうのがいろんな史料から出てきます。何回か、もしか

葉氏が家臣に対して命令をしているものです。これが氏胤で宛先が読めますかね。円城寺です。円城寺っていうのは千葉の有力な家臣で守護代です。守護代級、守護代だと思います。南北朝・室町期の千葉の最有力の家臣、円城寺に対して命令をしている。ということで、ちょっと細かくお話しすると時間足りなくなっちゃうんですけども、こうやって上総国の国務をやっているところから、当時は守護だったっていうふうに評価しても良いのかなというふうに思います。これが二回目の守護。そのあとはちょっとしばらくの間下総だけになってしまってますが、南北朝期はこうやってかなりたくさんさんの国の守護を歴任していた。非常に東国、関東のなかでも有力な一族だったっていうことで思っておいていただければいいかなというふうに思います。

ところが、氏胤なんですけど、若くして亡くなっています。氏胤何歳で死んだのかな。最初のレジュメを見ていただくと三三歳。亡くなっちゃうんです。すると子どもが、子どもは幼名竹寿丸。のちの千葉満胤ですけども、六歳のときに亡くなってしまっ、でも他に当主としては嫡流が継がないといけないので、満胤が若くして当主になります。もちろん当時は満胤とは言いません。竹寿丸っていうふうには文書に出てくるんですけども。ところが、そんななか、満胤が長じてからの花押を載せておきました。千葉氏のこの花押って、あんまり親子で似ないですよ。一人一人結構ユニークな形をしています。これも何かちょっと、何ていうんでしょう、滝川さんは玉ねぎみたいだって言っちゃったけど、こんな感じの、こういう花押です。これは大人になってからで、六歳だとそもそも花押はないんです。判始って言って成人して花押が書けるようにならないと文書を発給できないので、たぶん子どものころは、別の人が文書を発

給していたと思います。当主の代行として、一族のなかに胤重とか長胤とか出てくるのでたぶんそういう一門の、たとえば、前の当主の弟とか兄弟とかその前の当主の末の弟とか、たぶんある程度の年齢に達している一族が代行していると思うんですけども、そういう状態でちょっと家としては不安定です。当主が六歳で、六歳ですよ、うちの娘六歳ですけど、たぶん、お殿様はできないと思います。

ただ、そういうなかで、香取の相論という一族のなかでの争いがあったんですが、最終的には、満胤が成長していつて千葉氏のなかの混乱は収まっていく。そのあと満胤なんですけど、侍所の頭人になります。これ鎌倉時代で侍所っていうと、和田義盛の話出てきましたけど、大変なもんですよ。これを室町期ぐらいから千葉家が仰せつかっているということが分かります。これはぜひ言いたい。「殿中以下年中行事」っていう鎌倉府の礼儀書みたいなものがあるんですけども、ここ見ると、千葉氏に行き会ったときに向こうが興だったら馬を降りろって書いてあるんです。で、馬同士だったら『馬ヲセヘヨリヒカヘテ』たぶん端っこに寄せて控えて通り過ぎたら礼儀あるべしだからたぶんお辞儀しろっていうことなんだと思うんですけども、かなり千葉氏に対しての細かい、侍所、頭人ですから、かなり細かい礼儀が決まっていた。これ上杉家の場合は、馬に、お互い乗馬のときに馬を降りなければいけないかったので、上杉家よりは格下なんでしょうけども、一門級ですよ。足利氏の二門級のステータスを持っていた。道で千葉氏にすれ違ったらちょっと緊張しちゃう、そういう状態なんです。室町期の千葉氏は、いろんな内乱にも巻き込まれていきます。上杉禅秀の乱。これも細かく言うと二時間ぐらいかかっちゃうので、もう一言で上杉禅秀の乱という上杉氏の乱に加担しますけれども、何とか罰を受け

なったというふうに見られています。見られているっていうか、私が考えているだけなんですけども。なぜかという上胤直の子どもが上総の守護になっているんです。胤直の子どもってこのあと出てくるんですけども、一二歳ぐらいで家督を継いでいるんですけども、そうするとたぶん一二歳の少年が何か軍功を立てたりはしないので、たぶんお父さんの胤直が永享の乱で軍功を立てて上総の守護を任せられたんじゃないかというふうに考えています。常に複数の守護を有していた有力な千葉氏というところが出てきます。

これも、ちょっと時間があればゆっくり話したいところなんですけれども、どんどん代が変わっていきます。次、胤直の子どもの千葉胤将。さっき言ったように一二歳で家督を継いでいるんですが、今まではもうちょっとあとに継いでたかなって思ってたんですけども、この文書、これが出てきました。これ、古い県史では香取大禰宜っていつて一番トップの人の文書かっていうふうに言われていたんですが、私が文書館に行つて花押を確認したら、これだったんです。千葉胤将の花押だったんです。これでもって、胤将はたぶん香取の所領を安堵してるので、普通に考えたら一二歳の少年が香取の所領を安堵してあんまり効果ないですよ。それをやっているってことは、当主だったんですね。一二歳の段階でたぶん当主になっているというのがこれで分かった。かなり若くして当主になっている。この辺が新しく分かったこととしてはあります。これが何でこんな早く当主になったかっていったら、もしかしたら内部の争いがあったのかもしれないんですが、せっかく若くして当主になったのに、「危機」の後どころなんでしょうけども、二三歳で亡くなってしまう。二三歳若いですが、香取神宮に自分の病気の平癒を祈願した文書が残っているんですが、本当

ずに済むわけです。

そして室町期の千葉氏ということなんですけれども。今までいろんな守護として活躍してきたっていう話をしましたけれども、最近、私もちょっと注目してんですけども、安房の国の守護もやってたんじゃないかっていうことが言われています。これが、証拠というか文書なんですけども。安房の国に関して、所領を安堵してるんですね。安堵していて、この古文書のなかには千葉っていうのは一文字も出てこないんです。出てこないんですが、文書を出してる人が左衛門尉胤継で、この人、木内氏なんです。木内というのは千葉の家臣なんです。その人が一個上に仰せによって書いてある、赤字になってるんですけども、仰せによって、つまり誰かの命令を受けて木内氏が安房国の所領を龍興寺に安堵しているので、この仰せというのは、普通は木内氏が従ってるんだから千葉家の当主なんです。そうすると兼胤は満胤の子どもですけども、兼胤の時代には短い間かもしれないんですけども、安房にも守護職を持っていたって可能性もあるんです。このとき、複数の守護を持ってるっていう関東の武士は上杉氏以外はいないんです。かなりそういう意味でも評価されていたというか、何ていうんでしょう、鎌倉府からも重視されていた。侍所の別当ってことは警察権とかそういうものを持っていたわけです。

ですが、だんだん足利氏とそれを支える上杉氏との間に軋轢が出てきて、日本史ではよく勉強するんですが、永享の乱というのが起きます。永享の乱というのは、鎌倉公方と上杉氏が戦って、上杉氏に幕府が味方して、そして鎌倉公方が滅ぼされてしまう内乱なんですけど、そこも幕府軍に千葉氏は従うことで、より評価されます。たぶんだからだと思うんですけど、今度は、安房ではなくて兼胤の子どもの胤直は上総の守護に

にそのあとすぐ六月二三日に亡くなっちゃうんです。

そんななか、戦国時代の始まりと言われる享徳の乱が始まります。これまで、かなり勢力の高まりを見せていた千葉氏なんですけど、さっき野口さんのお話にも出てきたんですけども、分裂してしまいます。常瑞という人が出てきますが、この常瑞は胤将のお父さんの胤直という人で、出家したときの花押もさっきの胤直の花押と一緒なんですけども、出てきてます。幕府方となって活躍します。ところが足利氏からは非常に攻められてしまつて、分裂、千葉氏の分裂が起きていくってことです。

これ、足利成氏の出した文書になります。二行目から行くと、千葉介が出てきます。千葉介入道常瑞、これは胤直です。舎弟中務入道了心、これは弟の胤賢っていうふう言われています。そして宇都宮下野守等綱、宇都宮の、餃子の宇都宮のところのお殿様が、今川、あの今川です。今川上総介が東海道を、軍勢を率いて鎌倉にやってきたら、今まで足利氏の足利成氏の味方だったのに、そのあと符を合わせるが如く、まるで示し合わせたかのように寝返って兵を挙げた。足利成氏、怒ってるわけです。ところが千葉陸奥守入道常義、これはいわゆる馬加康胤ですね、千葉の宗家を奪ったという。親子は貞節を存じ味方に属す間、そんななか、馬加康胤親子は忠義を忘れないで自分の味方になってくれた。ので、諸軍を相添え、総州多胡・志摩両城雌雄を決し、千葉介入道兄弟、同専一家に円城寺、有力家臣円城寺、これを滅亡させたんだっていうふう成氏が言っています。ですからこのとき、一五世紀のなかごろ一四五五年、千葉宗家は一族である馬加康胤、それとそれに従う原一族によって滅ぼされる、いうことになります。

今日、新しいことを言えると思うと、何となく戦国時代は下剋上って

イメージがあるので、原と円城寺っていう家臣が戦って、その戦いのなかで、もつとその上の権力である千葉氏が巻き込まれて敗れていったんだっていうふうに語られることが多いんですが、ちょっと私、思っただんですけども、成氏が同じ年の七月二十九日に那須氏に対して宇都宮を討ってという命令を出してるんです。あいつは裏切ったから討って言うんです。これたぶん上の『符を合わせるが如く、ところどころで蜂起せしめ』が原因だと思うんです。つまり今川が来たから宇都宮は裏切った、だから討って那須に言ってるんです。で、裏切り者の宇都宮を討つんだったら、千葉もたぶん討伐命令出てますよ。だって私、学校の先生ですけど、A君とB君がガラスをぶざけて割ったら、A君だけ怒らないですよ。B君も怒ります。指導します。だから、たぶんそうなる。なので真ん中に書いた諸軍を相添えていうのは、たぶん足利氏の命令で出てきた軍勢も一緒にあって攻撃してるんじゃないかな、なんてことがちょっと分かった。これは、これも郷土博物館から提供いただいたんですけども、自害するときの胤直の様子です。これ、胤直とその子どもの胤宜と間違っちゃって、同行に書かれていて一五歳ってことで書かれてるので、本当は四十何歳なんですけども、こんな辞世が、本当かどうか分かんないですけど『見てなげき聞きて弔う人あらば我に手向よ南無阿弥陀仏』とあります。このような形で室町期において千葉氏は分裂した結果、宗家が滅びてしまった。そして、さっきあまり説明しませんでした、宗家の一部が武蔵に逃げて、武蔵千葉氏になる。馬加康胤、宗家を滅ぼした馬加康胤が次の岩橋系のまさに佐倉千葉氏につながる家になって、その佐倉千葉戦国期の時代の佐倉千葉氏につながっていくということです。

こういうふうに戦国が始まるときの内乱において、いろんな家が混乱

質疑応答

質問者A 一〇ページの系図のほうで、氏胤の子ども、増上寺を開いた聖総がいんですけども、これは聖総は氏胤の子どもとして認められないということ。」

石橋 すみません、ちょっと略図というか、私が必要なものを寄せ集めて作ったので網羅的ではないかもしれませんが、すみません、特に何か存在を否定するので載せていないということではありません。

質問者B 系図で馬加康胤のあと、岩橋氏の輔胤が家督を継承してと思うんですけども、なんでこの輔胤が千葉氏宗家の家督を継承できたのが気になると、輔胤は享徳の乱でどのような立場を取ったのか、教えていただきたいです。

石橋 大変興味深いところなんです、史料がなくて分かんないんですが、一つは康胤の子どもの胤持が普通は継ぐべきなんですが、康胤に先立って亡くなっちゃってるんです。これが一つ。たぶんそのなかで、誰が有力かっていうことで輔胤が最終的に選ばれたんだと思いますが、それ以上のことは分からない。ある程度の年齢で、康胤に次ぐ有力者であったということが言われると思います。

享徳の乱のときこういう立場だったかっていうと、これは康胤が千葉家の当主となつてからは古河公方がたというか足利成氏の方についていましたが、それより前は分からないんです。もしかしたら幕府方だったけれども、何かのきっかけで馬加康胤に従ったという可能性もありま

してるんですけど、千葉氏はかなりその早い例。その一つは、評価するとしたら、そういうかなり早い例のなかで、戦乱のなかで体制が整ったので、その後はそんなに大きな内部分裂なく堅固となったということも言えるんじゃないか。このあと享徳の乱が始まるなかで、鎌倉公方にも非常に千葉氏が忠節を尽くしてというところがあるんですが、そういうことができるのも、家がある程度安定してるからだというふうに言えるかもしれません。かなり駆け足だったんですが、南北朝、室町時代の千葉氏について、お話をさせていただきました。

このなかで幾つか評価点があると思うんですけど、鎌倉期からのものとしては非常にステータスもあった。鎌倉府の侍所の頭人にもなった。役職もあった。そして幾つかの守護を歴任した。非常に関東のなかでは最有力の武士と言って良かったんですが、こういう形で分裂をして、そして戦国期に行くということになりました。このあとのお話は、このあと広瀬先生のお話にご参考いただければと思います。私はこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

す。その辺は分からないので、私も勉強中なので何かあったら教えていただきたい。

質問者B 私、歴史は全くの素人なので変な質問かもしれませんが、一九ページの囲みの資料のなかに、市川に城郭を構え候ってということが書いてあるんですかね。その下のほうに、康生二年、一四五六年一月に市川合戦で千葉宗家は壊滅と、こういうご指摘がありますね。この市川っていうのは、場所はどちらになるんですか。」

石橋 例の、今の市川ですね。市川のところで最後合戦があって、残党が、その前の年に胤直とかは滅びてしまってますが、残党が残って、最後、市川合戦というのをやります。敗北して武蔵のほうに逃げていくということが言われています。」

質問者B そうするとこの市川というのは、例の国府台合戦の一〇〇年前ぐらいの話ということになるんですか。

石橋 そうですね。時期的にはそうなんですが、場所が、たぶん私の知る限り、ここでの市川合戦が行われたんだってというのは分からない。国府台合戦の場所だったか分からないんですが、いわゆる国府台合戦があったと言われている市川市の辺りであったことは間違いないと。

質問者C 最初、貞胤が南朝に帰っていて、降伏して北朝のほうに戻ったということなんですけれども、もともと降伏したのに、なぜその後、貞胤が千葉介でずっといられるようになったのか。実際に胤貞の急死のあとには胤泰が継いでると思うんです。ただ、実際には九州に下向している間に、どうも北朝の、千葉介の影響を受けた一族で千田の瀧南は、どう

も宗家のほうの影響が強くて胤泰はいづらくなって九州へ行ったというような話を聞いたことがあるんですけども、ただ、実際には足利家から見れば胤貞はずっと味方してくれた人で、その辺の力関係では、ずっとテコ入れあっても良さそうな気がするんですけど、なぜ貞胤がずっと力を持っていたのか不思議で、ちょっと聞きたかったです。」

石橋 「ありがとうございます。それも、県史に今のご質問と同じような書かれ方で、なんで降伏したのに重要視されるんだっていうことを書いてあるんですけども、一つはやはり千田氏の当主が亡くなってしまつて、胤泰が継いだとしても、その胤泰と貞胤とどっちが有力かつていうと、幕府の判断として、尊氏の判断としては貞胤というものがあつたのかもしれないんですが、それがどういう根拠があつたんだというところからいところだと思う。千田荘で内乱が起きてという話は、今日私、端折っちゃったんですけども、確かにそういうこともあつて、なかなかその後、千田荘のなかでこの千田系の一族の様子を伺うのはすごく難しくなつていくので、やはりさっきおっしゃったように、ある段階で勢力を失つていつて移動していったのかなということは、やはり言えるんじゃないかと思ひます。」

【発表2】

今よみがえる戦国千葉氏の本拠本佐倉城

広瀬 千絵 酒々井町教育委員会



発表者紹介 滝川 恒昭

それでは続きまして、広瀬先生からお話をいただきましたと思います。
 今までは、文献史学の研究成果に基づくお話ということでした。文献史料の少ない古代、中世においては、やはり地域史を解明するためには文献史料だけではなく考古学が絶対、考古学の成果も入れなければいろんなことが分からないということ、きょうは千葉氏の最後の拠点である本佐倉城、これを直接発掘した方、広瀬さんにいろいろお話をしたいと思います。

まさに戦国期の千葉氏に直接アプローチしている方、肌で感じている人ということで、いろいろこの発掘にまつわる話をしてもらいたいと思います。それと今日、皆さんのお手元にパンフレットが配られていると思います。これは通常ですと、本佐倉城跡のガイダンスホールでしか入手できません。しかし今日は広瀬さんの働き掛けで、酒々井町の格別なご厚意で皆さんに提供してもらいました。いろいろ中身も楽しいですから、あとでご覧になってください。それではよろしくお願いいたします。

酒々井町の生涯学習課で文化財を担当しております広瀬と申します。今日はよろしくお願いいたします。

今ご紹介いただきましたとおり、私の専門は考古学でございます。ですので、今まで本佐倉城跡の発掘調査ですとか、調査後の整理作業を担当してまいりました。本日は本佐倉城、戦国時代の千葉氏が作り上げた本佐倉城というのはどういった城だったのかというのを、考古学の発掘調査成果を基に皆さんにお話をさせてもらおうと思っております。図面や写真をちよつと多く用意しましたので、もう少しだけお付き合いをいただければと思います。

私が本日いただいたお題は『今よみがえる戦国千葉氏の本拠本佐倉城』でございます。大きい一番、はじめに(一)本佐倉城とその城主千葉氏の歴史概略でございます。本佐倉城、この図一にありますとおり、千葉県の当時は北から下総国、上総国、安房国というふうに分かれておりましたが、そのうちの下総国を主に領国としていたのが千葉氏、本佐倉城になります。本佐倉城の位置はこちらになります。

本佐倉城は文明年間、西暦で言いますと一四六九年から一四八六年に千葉輔胤、それからその子ども孝胤によって築城されたと考えております。輔胤、孝胤の千葉氏系図の位置は図二になります。先ほど来お話に出てまいりました享徳の大乱のなかで千葉氏の内紛が起こりまして、本家に代って下総守護千葉氏の家督を継いで居城を鎌倉時代以来の千葉から佐倉、現在の酒々井町周辺を、本佐倉城周辺を昔は「佐倉」と呼んでいて、本佐倉城も「佐倉の城」などと呼ばれていましたがその酒々井町周辺の佐倉に移しました。

私、地図で亥鼻から本佐倉城へ移つたように書いております。先ほど、

野口先生も石橋先生も、千葉氏の本拠は、今、千葉市立郷土博物館のあった亥鼻城、亥鼻の地ではなく、その下にある裁判所のある辺りが有力地ですよというお話をされていました。私ももちろん存じ上げておりましたけども、こういった地図を作るなかで亥鼻と書いたほうが皆さんに伝わりやすいかなと思いましたが、完全に裏目に出しております。すいません。そうしまして、千葉氏の本佐倉城を居城とした支配は天正二八年、一五九〇年に豊臣秀吉に滅ぼされるまで、佐倉千葉氏九代、約一〇〇年間続きました。一〇〇年間の歴史をここでお話ししますと時間に入りきりませんので、代わりに先ほど滝川先生からご紹介いただきましたが、皆さんのお手元にこちらの冊子を配らせていただきました。『関東の名族千葉氏の最後の居城、国史跡本佐倉城跡』です。こちらに一〇〇年間の歴史の部分と、これからお話しします本佐倉城っていうのはどういう城だったのかというような内容が説明として入っておりますので、もしご興味ありましたら、ご自宅に戻ってちよつとご覧いただければ思っております。

続きまして(二)その移転先の本佐倉城の立地と環境についてです。図の四が本佐倉城跡の周辺図になります。この地図の濃い緑色の部分で示した部分が本佐倉城です。印旛沼の南側に面した標高約三〇メートルの台地上に立地します。城の北側には、現在の印旛沼ですとか手賀沼ですとか、茨城県の霞ヶ浦ですとか北浦が、戦国時代当時は合わさって大きな内海を形成しております、そういった香取海による水上交通の要所であった立地ということが出来ます。それから、この城の南側です。城の南側には、この地図の白い線が当時の街道を示しているんですが、この東西南北に走る街道が、本佐倉城の南側の城下に集まってきていて、

さらに東西南北に伸びていつているというような陸上交通の要所でもありました。ですので水上交通、陸上交通の要所に立地していたということが出来ます。さらにこの本佐倉城の周辺には、城を中心として北に浜宿港、西に鹿島宿、南に佐倉宿、東に酒々井宿というような城下が衛星状に点在しているというような立地になります。

続きまして、本佐倉城跡の本体のお話に入っていこうと思います。(三) 本佐倉城跡の構造です。本佐倉城は、北総台地の特徴であります、台地とその奥深くまで樹枝状に入り組んだ谷津の地形という、北総台地の特徴になるんですが、そういった地形に築かれた城です。城域が南北で八〇〇メートル、東西で七〇〇メートル、総面積が三五万平方メートルあります。非常に大きな城郭です。東京ドーム七、八個分くらいあるような大きな城でございます。一〇の郭によって構成されていまして、内郭群が七郭、外郭群が三郭によって構成されております。内郭群は、一の郭が城山、二の郭が奥ノ山、三の郭が倉跡、四の郭は名前が付いていません。五の郭は東山、東山馬場、六の郭が東光寺ビヨウ、七の郭がセツテイ山、ここまでが内郭群です。それから八の郭が荒上、九の郭が向根古谷、一〇の郭が根古屋というように、西側から南側にかけて外郭群が取り付くというような構造になっています。

これらの城の造作というのが約五〇〇年前、すべて当時の人の人力で台地を削って谷を埋めて郭を造成して、土塁、空堀を配置して作った土の城になります。よく、「石垣はないの？」なんて聞かれるんですが、全部人力でしかも土木工事をして作った城になります。石は使っていません。

さて、ここからがきょうの本题、本佐倉城跡の発掘調査成果について

倉千葉氏が本佐倉城を居城とした時期というのは、だいたいこのぐらいの時期になるんじゃないかなと考えております。そして出てきた遺物をそれぞれ郭別に円グラフで示すと、この図七のイラストのようになります。この円グラフをご覧いただくときにポイントになるのが、黄色く塗りつぶした、かわらけの比率になります。かわらけというのは、下の写真にありますとおり、素焼きの土器で、土器のお皿みたいなもんですね。素焼きの土器で、武家の儀式や儀礼で使用する器です。儀式、儀礼というのは、武家が主従関係を確かめるために行う式三献ですとか、正月の年頭儀礼ですとか、代替わりですとか、元服などの行事で儀式、儀礼を行います。そういうときに使うのが、これらのかわらけになるんです。かわらけの出土比率が高いのは、たとえばこの円グラフを見ますと、城山ですとか、奥ノ山ですとか、この左下のセツテイ山です。こういった郭が、かわらけの出土比率が高いわけです。ですので、これらの郭には何かあるなというふうに考えます。何かかわらけを使って儀式をするような人がいたんじゃないかなとか、そういったことを、こういったところからちゃんと勘ぐるわけです。

その他の遺物としましては、円グラフの緑色と紫色、緑色が瀬戸・美濃製品、紫色が常滑製品です。遺物でいうと下の写真のようなものですが、現在の愛知県を中心とした東海地方から流通してきた流通品です。こちらがすり鉢、瀬戸・美濃製品のすり鉢。この小さいのが天目茶碗。この右下の薄緑色の釉がかかったのが小皿です。調理具ですとか、供膳具といったものになるかと思っています。

そして左側の大きな破片です。紫色のこういった大きな破片は、常滑の甕になります。これは破片なんですけども、常滑甕完形品は、もう本

になります。大きい二番の発掘調査成果について。(二)の城域全体の調査になります。本佐倉城跡は国の史跡に指定されています。平成一〇年九月二日、千葉県初で、当時唯一の城郭として国の史跡に指定されました。その後、平成二四年に南房総市の岡本城跡と館山市の稲村城跡、里見氏の本拠地ですね。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、国の史跡に指定されまして、現在は千葉県に国史跡は三つということになっています。本佐倉城はそのうちの一つです。

この国史跡指定の前と後で発掘調査を実施しているんですが、最初に、城域全体に確認調査を行って、検出された遺構や出土遺物の組成などによって、郭の性格、たとえば階層差ですとか機能差というのがあるのかということ推測して、城域全体の空間の利用方法をつかみました。図六をみると、各郭に細長い調査区が入っているのがご覧になれると思います。これを地上から見ると左下の写真なんです、この幅が二メートル。長さは郭の大きさによって任意で五メートルだったり、一〇メートルだったり、一五メートルだったりするんですが、こういった細長い調査区を設定して、この場合はだいたい今の地表面から三〇センチくらい表土を剥ぎますと、黒いシミがたくさん出てきます。今、見えているのはだいたい楕円形のシミになるので、恐らく掘立柱建物跡を構成する柱が、柱穴になるんじゃないかと思うんですが、確認調査でこういった遺構がどのくらいの範囲で、どのくらいの量が出てくるのか。それから出土する遺物、遺物の量ですとか遺物の時期がどのくらいの時期になるのか、そういったことを調べるわけです。

このときの確認調査で出てきた出土遺物の時期を調べますと、だいたい一五世紀後半から一六世紀の遺物が出土します。ですので、恐らく佐

当に小さな子どもならすっぽり入っちゃうくらいの、とても大きなものになります。こういったものに、お水ですとか液体物というものを保管するわけです。ですので貯蔵具になります。

それから円グラフの茶色ですね。在地系土器です。在地系土器は、やはりこの写真にありますとおり、すり鉢です。すり目が見えます。あとはいこういった内耳鍋、お鍋ですね。土鍋です。土鍋などが出土しています。これも調理具と言えるものだと思います。

それから円グラフの水色の貿易陶磁器になります。今まで見てきたものは、国産の土器や、国産の陶磁器です。国内で作られて国内で流通したものの。に対してこちらは中国から輸入されたもので、中国から入ってきて日本に流通したものです。緑色の釉がたくさんかったものとか、右下の藍色の呉須、染め付けで絵が描かれたものの破片がたくさん出てきています。この破片だとかよくと分かりにくいので、図面、イラストに復元しますと、下のイラストのようなものになります。左下のこの染め付けのお皿というのは、割とよく出てきます。中世の城郭ですとか館跡ですとか、集落などからも割と出てくるものなんです、この右下のものは高級品です。千葉氏ならではの持ち物と言えるかと思いますが、たとえば青白磁の梅瓶ですとか、そうか、私しません、当日資料には、ちょっとこのキャプションが抜けたものを、そうですね。図八の出土遺物の写真のところで貿易陶磁器で復元したイラストを載せたところでは良かったんですが、これはこういうものですよといったキャプションが抜けてしまっていて。ですので代わりに、別冊でお配りしましたパンフレットの二二ページに同じものがカラーで載っていますので、こちらを参考いただければと思います。

高級品の内訳としては、青白磁の梅瓶ですとか、青磁の酒会壺ですとか、白磁の四耳壺のような、こういった高級品も、高級品の破片ですけどもたくさん出てきています。千葉氏ならではの持ち物ということができます。威信財ですとかステータスシンボルといわれるものになります。こういったことを踏まえてもう一度全体を見てみますと、それぞれの郭を見てみますと、まずかわらけの出土比率の高い城山は、このあと別立てですぐあとに詳しくお話しますので、ちょっとあとに回させていただきます。奥ノ山ですね。奥ノ山もかわらけの出土比率が高いです。奥ノ山は、江戸時代の史料にはなるんですが、本佐倉村千葉家故城址の図という、成田参詣記、成田名所図会、という、幕末に近いところに刊行された本のなかの挿図の一枚に本佐倉城の絵図面が入っています、その奥ノ山の部分を見ますと、「奥ノ山」、「元メ王ウケン」、「妙見」、それから鳥居のマークが書いてあります。奥ノ山に妙見宮がどうもあつたらしいというのが、こういったところから推測するわけですが、さらに確認調査で、発掘調査でも図六の奥ノ山の茶色い四角、一五メートル四方の基壇の跡が検出されています。

それから戦国時代当時の記録のなかに、「本佐倉城の五代目と八代目の当主は佐倉妙見宮で元服をした」というような記録も残っています。恐らく奥ノ山に佐倉妙見宮があつたんじゃないかなというふうに、現在では考えております。ですので、かわらけがたくさん出ているということは、もしかしたらここで元服の儀式をしたんじゃないかなとか、そんなふうに考えるわけです。

続いて、倉跡です。倉跡は、まず遺構としては、掘立柱建物跡がたくさん出ています。さらに遺物を見ますと、貿易陶磁器、瀬戸・美濃

ります。ですので、一つ考えられるのは、ここに人質とか置いておくと思われ、逆にはセッテイ山というのは地元で『セッタイ』などと呼ばれていて、たとえば外から来たお客人をこちらに入れて接待するところなのかなとか、もしくは一族家臣の屋敷、内郭群の主体的な部分に比べてちよつとランクの落ちる一族とか、家臣屋敷があつた場所かなとかそういったふうに考えます。ここまですが内郭群で、広いんですけれども、人が住んだのは城山、奥ノ山、倉跡、セッテイ山になるということが分かつてきています。

続いて外郭の荒上ですとか向根古谷についても、こちらの郭は内郭群に比べて、ご覧いただいて分かると思うんですがすごく広い面積を持つことが特徴です。出土遺物も見ますと、今までの国産陶磁器、貿易陶磁器、かわらけというのがまんべんなくバランスよく出てきていることが分かります。掘立柱建物跡も粗密はありますが、たくさん出てきています。あとちよつと倉跡と違うのは、高級品である貿易陶磁器が少ないです。ですので、たとえば家臣等の屋敷があつた場所かなとか、あと戦国時代当時の記録のなかで、下総から軍勢が出陣する際に、佐倉で一度集結して兵を整えて出陣しなさいというような命令を出す記録が残っています。そういった場合の駐屯地としてこういう広い場所が使われたかなとかそういった可能性もありますので、家臣等の屋敷があつた場所かな、それとも兵の駐屯地のような場所かなとか、そういったことを考えております。

それで、本佐倉城の発掘調査をだいたい三〇年ぐらい、私が三〇年やってるんじゃないくて、三〇年ぐらい発掘調査が続いているんですが、今まで調査のなかで井戸が出てきたことがなかったんです。最近やつとこの奥ノ

製品、常滑製品、在地系土器、かわらけといった遺物が、供膳具、調理具、貯蔵具というのが満遍なく出土しています。城山や奥ノ山に比べて遺物の組成のバランスが非常にいいわけです。城山みたいなところでは、人は生活できません。素焼きの土器のお皿しかないわけで、じゃあ他どうやって生活したらいいの、お鍋もすり鉢もなくてというような、そういったことを考えますと、この倉跡というのは人が住める郭だなというふうに考えます。さらに高級品の貿易陶磁器も一定量出ていますので、たとえばどういうふうにご利用したかなと考えるときに、当主の日常の生活をしたような常の御殿があつた場所かなとか、もしくは家臣等の屋敷だったかなとか、郭の名前のおり倉跡といえますので倉庫群があつたのかなとか、そんなふうな推測を現在立てています。

続いて四郭、東山、東山馬場（五郭）、東光寺ビヨウ（六郭）ですが、こちらの三つの郭は、まず地上遺構で、虎口、虎口は城郭用語で出入口施設のことを言うんですが、虎口が形成されていることが分かるのと、実際に発掘調査でも掘立柱建物跡なんかは検出されませんが、門跡ですとか木戸跡といった出入口施設が実際に検出されています。ですので、人が生活するような場所ではなくて、出入口施設としての役割を持った郭じゃないかなと考えられます。

内郭群最後のセッテイ山になります。こちらもかわらけの出土比率が大きいところなんですが、郭の縄張りの特徴があります。セッテイ山は他の郭と違って土塁がありません。守るべき防御するような施設がないんです。さらに郭の周りは本佐倉城で最も深い空堀、一〇メートルと二六メートルの深さのある空堀に囲われています。そういった非常に隔絶した郭なんです。他の城山や奥ノ山や倉跡に比べて、非常に隔絶した郭にな

山の南側の一段低い場所、ですが田んぼの面よりはちよつと上の標高一〇メートルとか一メートルぐらいのところにやつと、図六の実測図で見ると茶色い土塁で囲われたなかに、この水色に塗りつぶした部分、こちらが直径二メートルぐらいの井戸状遺構、もしくはすり鉢状の水溜めのような遺構なのかもしれませんが、どちらにしろ井戸郭にはなるかと思っております。ついに井戸状遺構見つかりました。

今までこんなお話をしますと、「本佐倉城には井戸がないんですか？」って、「井戸がなくてどうしてたんですか？」っていうふうに聞かれることが多かったんですが、発掘調査でちよつと出てこないものは今のところ出てこないで分かりません、なんて言ってたんですけども、これでやつとどうもちよつと低い位置に井戸が設置されていたことが分かりました。それを昨年度末の報告書でやつと報告することができました。一番新しい情報です。

さて、ここからは内郭群の調査のなかでも城山を取り上げて見ていきたいと思えます。図十は城山を発掘したときの真上から撮った航空写真です。地上から見ますと、図一のように小っちゃいのか大きい穴がたくさんボコボコボコと開いているような、こういった景観なんです。こんなふうにはたくさん、これら全部遺構になるんですけども、遺構が見つかっています。これらは掘立柱建物跡を構成する柱穴（ちゅうけつ）、柱穴（はしらあな）がほとんどなんですけれども、このなかから掘立柱建物を構成する建物跡を復元しますと、図十のような建物が、屋敷ですね、屋敷があつたんじゃないかなと現在では推測しています。写真でちよつと分かりづらい部分もあるのでこれを実測図にしますと、図一二になります。城山から検出された遺構群というのは、この茶色で塗りつぶした

部分が土塁です。ですので、土塁に囲われた城山の敷地のなかには表門、ここに大きな門跡が出てきまして、それから大きい建物一つ、二つ、三つ。それからこちらに園池状遺構。そしてその横に小っちゃな建物が四つ。それから土塁の上、北側の上に櫓が一つ、南側にも一つ。帯郭、一段下がった帯郭の東側の角に一つ、この三つは恐らく櫓跡になるかと思えます。

これがどういった屋敷なのかということを考えるときに、参考にさせていただいているのが、国立歴史民族博物館の名誉教授でいらっしゃいます小野正敏先生が提示されている武家の概念的な屋敷空間について表した、こちら右側に出しておきました、都型館屋敷空間模式図、大名館の空間原理というものです。どのような内容かといいますと、正方形、もしくは長方形、これは地域によって異なりますが、の屋敷地のなかに、ハレの空間とケの空間に分かれていまして。礼門、表門ですね、入って主殿の南側には広庭が、会所の南側には池庭がつく。それからハレの空間を支えるためのケの空間には、台所のような厨房ですとかお手洗いですとか、あと当主が日常の生活を送るような常御殿というものがあるというような模式図を提示されています。この模式図は、都やその影響を受けた大名クラス、当時のトップクラスなんですけど、の館、屋敷の理念的な空間モデルになるんですけど、ちょっと難しいので、ものすごく噛み砕いて言いますと、全国の大名館や都の上級武家屋敷といったそういった屋敷の屋敷づくりを見ていきますと、どうも各地の大名は自分の権威を表すために、こういった模式図にあるような屋敷空間を目指して自分たちの屋敷づくりをしていたというようなことが推測されています。そして恐らく千葉氏もこのモデルを志向して屋敷づくりをしたことが推測され

ます。先ほど見た城山の遺構群もこれらを踏まえて見直すと、右上の模式図のようになるかと思えます。だいたい長軸が八〇メートル、短軸が三〇メートルの長方形の屋敷地のなかに、南側に表門が付いて、表門から入ると主殿の前に広庭が、会所の南側には池庭が付く。ここまでがだいたい屋敷地の三分の二になって、ハレの空間になるかと思えます。その横に小さな建物がぎゅっと四つありまして、こちらがハレの空間を支えるようなケの空間。この辺りからすり鉢なんかも出てますので、恐らく台所みたいな施設があった可能性があります。

このように千葉氏は恐らくこの城山の上に、自分たちの権威空間を作ることを目指したと考えられます。そしてこの作り上げた権威空間で何をするのかといいますと、先ほどかわらけを説明した部分で言いましたとおり、当主がこの権威空間において家臣等に対して主従関係を確める対面儀礼、式三献ですとかそういった儀礼を行って自分の権威をアピールした、そういった場所に使ったんじゃないかと思っております。

さて城山だけの話をしておりますとあまり時間がなくなってしまうので次に進ませていただきます。本佐倉城の発掘調査成果を説明するときにトピックが二つあります。大きなトピックが二つありまして、一つは今説明しました城山の屋敷についてです。もう一つは、この城山の屋敷までたどり着くために通らなくてはならない六つの門を要する登城路です。登城路というのは、図六に赤い文字で一番、二番、三番、四番、五番、六番と書いてあるところがあります。ここから門跡ですとか木戸跡というのが出てきております。キャプションを振ってなくて申し訳ないんですが、この一番二番のあるところが城山の北側の玄関口であります東山虎口と言われる場所で、この東山虎口から城山の千葉氏の屋敷まで行

くの六つの門を通らなくてはならなかったというような登城路についての説明をしたいと思うんですが、ちょっとそこをやつてますと、今日の時間に入りきらなくなりますので、二年くらい前に、六つの門というのはこういう門だったんじゃないかですとか、こういうふうなルートを通じて城山の上まで行ったんですよというふうな、本佐倉城のそういった発掘成果を踏まえた紹介をする動画を作りました。その動画は『発掘された六つの門と千葉氏の屋敷』というタイトルで今、佐倉市生涯学習チャンネル、YouTubeチャンネルで配信しています。動画はCGで門が写真のなかに復元されている様子ですとか、そこを通過して次はこう行くんだというような、そういったのは動画でご覧いただけます。非常にこの登城路の説明をするのに分かりやすいかと思えますので、もしご興味ありましたらご自宅に戻られたあと、パソコンで見ていただければありがたいと思います。

私は酒々井町の職員なんですが、なぜ佐倉市生涯学習チャンネルなのかといいますと、本佐倉城は酒々井町と佐倉市にまたがって存在しています。酒々井町に面積の八割、佐倉市に二割またがっています。ですから、佐倉市さんこういった本佐倉城の普及ですとか活用事業というのは一緒にやらせていただいております。あと酒々井町にYouTubeチャンネルがありませんので、こちらの佐倉市さんのほうで公開をさせていただいている、そんな理由になります。

さて、ではまともに入つていこうと思います。大きい三番『千葉氏の屋敷の時期、主、その意味』でございます。会所推定の建物跡の地鎮具として使われたかわらけというのに注目します。先ほど見ましたあの会所の建物の真ん中には、地鎮具としてかわらけが使われていました。図

一二のAのかわらけがそうなんですが、二枚のかわらけをこうカポッと合せ口にしたような形で、ちょうど建物の真ん中から見つかっています。地鎮具と考えられます。実測図を見ますと、口径と底径の差が小さくて、器高、器の高さが低いものです。こういった特徴があります。この特徴は小田原で出土するかわらけに類似するもので、小田原模倣のかわらけと考えているものです。小田原の編年に、ちょっとこのかわらけを当てはめますと、おおむねだいたい一六世紀の第三四半期ごろに相当しますので、それを模倣するということは、それ以降の年代が考えられます。ですので、この会所の時期、それから会所と有機的な関係がある他の建物、ですので屋敷群については、一六世紀第三四半期、大きく見て後半ごろに建てられたものじゃないかと考えています。

一六世紀後半ということは七代胤富、タネトム、タネトミと言ったりします、八代邦胤の時期になります。先ほどAのかわらけ、小田原模倣のかわらけですというお話をしたときに、じゃあ本佐倉城の在地のかわらけというのはどういうものかについてのご紹介するために、図一五を用意しました。口径と底径の差が大きくて、器高、器の高さが高いものが、だいたい本佐倉城周辺の在地の地元のかわらけになります。全然形が違ふことが分かんと思えます。それから図一六の系図、七代胤富、ここです。その子ども、八代邦胤。邦胤は小田原北条氏の四代目の当主氏政の娘と結婚しています。その間に女の子が一人生まれていて、ですので千葉氏と北条氏は姻戚関係だったんです。ですので小田原のかわらけが出てきてもおかしくはないわけです。この七代胤富、八代邦胤の時期は、一六世紀後半の千葉氏っていうのは、内外の危機に直面して、克服に奔走しなくてははいけない、ちょっと大変な時期の当主でした。千葉大学の名誉

教授でいらっしやいます佐藤博信先生のご研究を参考にさせて頂いて
いるんですが、こういった時期、内外の危機の、内の危機としましては、
たとえば家中、一族、家臣団内部の権力闘争が挙げられるかと思っています。
年表は、天文二六年（一五四七）から始めちゃったんですが、この前の
年、天文二五年（一五四六）に四代目の当主の昌胤が亡くなっています。
五一歳で亡くなっていて、跡を継いだ五代目の利胤がもうすぐ亡くなっ
ています。それから弘治三年（一五五七）六代親胤がさらに一七歳で亡くなっ
ています。こんなふうに一〇年ぐらいの間で、当主が三人も交代してい
るわけです。利胤の死因は、一部の系図には自害というふうに書かれて
いたり、親胤は家臣による暗殺だったり、または病死というような記録
もあります。ちなみにこの天正一三年の邦胤も家臣による殺害だったり、
または病死だったり、こういったふうに当主の、何ていうんですか、当主
の不審な死といいますが、そういったものが続いている時期なんです。で、
この時代当主には、それぞれ当主を支える権力基盤である家臣団という
のが存在しました。ですのでこういった立て続けの当主交代の背景には、
家中内部の権力闘争があったんじゃないかということ想像しています。
ですので、内の危機としては家中の内部の権力闘争というのが挙げられ
るんじゃないかなと考えております。外の危機としては、外部勢力、
上杉謙信ですとか里見氏ですとか正木氏というのが、この時期立て続け
に下総、千葉氏の領国内に攻めいつてきています。こういった内外の危機
を克服して領国支配をしていくために、胤富、邦胤というのは当主の権
力を示す必要性があったんじゃないかと推測しています。

ですので、この最後の部分、結論になりますけども、こういった一六世
紀後半の時代背景を鑑みますと、城山、先ほど見ました屋敷のあり方

質疑応答

質問者A 最後に外部勢力の話がありましたけれども、これ、城の
構造上、敵はどちらから侵入するのを想定しているとかそういったのがも
し分かるようでしたら教えてください。

広瀬 そうですね、難しい、難しいです、とても。私も、敵が本
佐倉城を攻めるときに、どこからかかっていうのを考えるときに、じゃあ
大手はどこかな？とかそういったことも考えたんですが。有識者の先生方
にももちろん伺ってるんですが、よく城には大手があつて大手門ってい
うのがあるんですが、本佐倉城はどうもそういった突出したここがメインの
門、何ていうんですか、出入口施設だというのがどうも見えてこないん
です。ですので、言い方としては何々口、何々口、何々口というような言
い方が適切ではないかというところで今、落ちていきます。です
ので、先ほどの北側の玄関口の東山虎口、それから城山のすぐ下に一つ
虎口があります。そこが東側の虎口です。西側の虎口は今ちよつとなか
なか遺構として残っていないんですが、外郭の荒上から入る虎口があつた
と推測されます。ですので、南側もやはり向根古谷という外郭があつて、
なかなか攻めにくいところですが、確かにさすが千葉氏の本城だなと
いうところはあるので、とても難しいところなんです。私の個人的な
考えですけれども、一番東側の城山の下には確かに虎口があつたんです
が、東側が一番こう、何ですか、外郭を挟まなくて済む。あとは水上交
通のぐちゃぐちゃの湿地を経なくて済むというところがありますので、東
側がどうかということでは許していただけないでしょうか。

というのは、権威空間の創出というのは七代胤富、八代邦胤による領国
支配のための権力の荘厳化、権威の向上、こちらは佐藤先生のお言葉
をお借りしていますが、権威の向上を図る手段、舞台の一つであつたので
はないかというふうに考えております。

私の発表は以上なんですが、最後にちょっと宣伝なんです。本佐倉
城跡の入り口のところの駐車場には、国史跡本佐倉城跡案内所があり
ます。なかには小っちゃな展示スペースですとか、あとガイドさんもいらっ
しゃって、お話を聞いたり、お城のガイドしてくださったりもしています。
これからやつとだんだん涼しくなりますので、ぜひよろしければ、現地
のほうにも遊びに来ていただければと思います。これで私の発表は以上
になります。ありがとうございました。

質問者B

僕も現地に二、三回ぐらい行ったことがあります、非常
に大きなお城だなんてふうに思いました。最初からこんなに大きなお城
ができてたとはちよつと思えないと思ってまして。図七のイラストとか見
ても、外郭部のほうが、やっぱり縄張りのにはしつかりしてるっていう
のを考えると、何となくなんですが、一郭から四郭辺りまでが最初できて、
そのあと徐々に広がってつてこういう形になったのかなというのが想像で
きはするんですが。出土遺物から明確にそれぞれの郭のできた時期とい
うか、使われた時期とかの差というのが分かったのかどうか教えていただ
ければと思っております。あとまたちよつとたいした質問じゃないですけ
ど、図七のところに、円グラフのところに二つだけチェックボックスが付い
ているんですけど、これ何か意味があるのかなというのをちよつと併せて
お答えいただければと思います。」

広瀬

このチェックは、東山、東山馬場と四郭は、虎口郭という
お話をさせてもらいましたけども、虎口郭なので非常に遺物の出土量が
少ないんです。ですので、円グラフにして検討するというようなやり方が
なじまないという話を途中しようと思って飛ばしてしまったので申し訳あ
りませんでした。それから郭ごとの出土遺物で時期差が出るかというこ
となんです。これは私も、今、見ていただいている図七は、戦国時代の
最終的に成長きった本佐倉城の形ですので、もともとはやはりおっ
しゃるとおりたとえば城山と奥ノ山だけだったかなとか。倉跡ぐらいまで
入るのかなとか、そのくらいの小っちゃな城から今、見る最終形態になっ
たんだと思うんですが、遺物を見ますと、ほとんど全部の郭が一五世紀
後半から一六世紀の遺物が出ます。わずかに向根古谷がちよつとだけ遅
れるっていうくらいで、遺物からはあまりそういった差が見られないので、

最初からこの最終形態のプランを計画していたかどうか分らないんですが、考古学的な成果からはとりあえず全域からほぼ同じ時期の遺物が出ますということになります。

質問者B すいません、最後に。向根古谷に馬出しがあるというふう
に伺ってるんですけど、そこは案内とか標識とか説明されるようなところ
あるんですか？

広瀬 向根古谷には実は看板とかはまだありません。今おっ
しやったように、ご存じの方が地図を見て現地に行っていたかどうかにな
るか、あとガイドさんがいますので、ガイドさんに御案内いただくか。た
だ、まだここは民有地といいますか、個人の方の土地ですので、特に大々
的に看板とかそういったものは立てていません。

閉会あいさつ

成松 恭平 敬愛大学副学長



千葉敬愛学園創立二〇〇周年記念事業、歴史シリーズ講演会の閉会に当たりまして、一言御礼のごあいさつを申し上げます。まずは多くの皆様にお集まりいただきましたこと、そして長時間にわたりまして、ご熱心にご聴講いただきましたこと、誠にありがとうございました。

今回の講演会につきましては、定員三五〇名を予定していました。しかしその関心度は高く、定員の倍近い応募者があり、喜ばしいことではありましたが、やむなく抽選とさせていただきます。応募いただいた方全員にご参加いただければ良かったのですが、今回ご参加いただけなかった方々には大変申し訳なく思っております。お詫びを申し上げます。次善の策として抽選に漏れた方にも、今回の講演をご視聴できるようにと、隣の新校舎に、中継ではありますが、スクリーン画面でご覧いただけるようにいたしました。この会場の方々、そして中継によるスクリーン画面でご視聴の方々、大変お疲れさまでございました。

また知的好奇心を呼び起こす本日の講演会を非常に有意義なものとしていただきました講演者の皆さま、野口実先生、石橋一展先生、広瀬千絵先生の御三方には、改めまして心より御礼を申し上げる次第でございます。ありがとうございました。

千葉敬愛学園は二年後の二〇二六年に創立二〇〇周年を迎えることとなります。『千葉氏研究最前線』ここまで分かった千葉氏の実像』と題した今回の講演会は、二〇二六年の一〇〇周年に向けたシリーズ第一回目として開催をしたものです。奇しくも二〇二六年は、この千葉氏による千葉開府九〇〇年に当たり、節目の年となります。本日の講演会テーマにつきましても、非常に時と場所を得たものとあつたと考えているところであります。多くの方々にご満足いただける講演会だったので

はないでしょうか。また学園といたしましても、今日あることについて地域の皆様に支えられた二〇〇年だったと思いを新たにしたいところでございます。

最後になりましたが、今回の開催に当たりましてご後援をいただきました県教育委員会、市教育委員会、里見氏研究会、特に里見氏研究会の皆さまには不慣れな私たちの会場運営に多くの協力をしていただきました。とは言え、もし運営面で皆さまにご不快を与えたならば、すべて私どもの責任でございます。不行き届きの点はご寛恕いただければ望外の幸せです。次はお気に召すように努めます。これら多くの皆さまに感謝を申し上げて、閉会のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。

